

令和7年度 全国学力・学習状況調査

# 調査結果の概要

吹田市教育委員会

## 目次

はじめに	.....	P	1
1 調査の概要	.....	P	2
2 教科に関する調査結果			
(1) 全体の概要	.....	P	3 ~ 7
(2) 各教科の概要	.....	P	8 ~ 31
3 児童・生徒の質問調査結果	.....	P	32 ~ 45
おわりに	.....	P	46

## はじめに

本市では新たに「第3期吹田市教育振興基本計画 吹田市教育ビジョン」を策定し、「<sup>いのち</sup>生命かがやき ともにつながり <sup>あす</sup>未来を拓く吹田の教育」という教育理念のもと、基本目標の一つとして「総合的人間力の育成」を掲げています。そして、確かな学力、豊かな心と健やかな体を育み、主体的に行動し、多様な人々と協働しながら未来を切り拓いていく児童・生徒の育成をめざしています。また、本市では、令和7年度から令和11年度までを取組期間とする「第4期吹田市小中一貫教育推進プラン」（吹suiプラン）を策定しました。校種間の段差軽減を通した学びの連続性と成長を目指しています。全国的に不登校の児童・生徒が増加する中、児童・生徒一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくため、各中学校ブロックにおける小中一貫教育の取組の重点化・焦点化を図ることを大切にしています。

# I 調査の概要

## (1) 調査の目的

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童・生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## (2) 調査実施日

令和7年(2025年)4月14日(月)～17日(木)

## (3) 調査対象

小学校6年生、中学校3年生の児童・生徒

## (4) 調査事項

### ア 教科に関する調査

小学校(国語・算数・理科)、中学校(国語・数学・理科)

※ただし、中学校理科は、生徒の活用するICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム(MEXCBT)によるCBT方式で実施。(「CBT」とは、Computer-Based Testingの略で、コンピュータ使用型調査のこと。)

### イ 児童・生徒質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問調査を、児童・生徒の活用するICT端末等を用いて実施。

### ウ 学校質問調査(学校に対する調査)

学校における指導方法に関する取組や学校における教育条件の整備の状況等に関する質問調査をオンラインによる回答方式で実施。

## (5) 今年度の調査の特徴

### ア CBT調査の導入(中学校理科)

### イ 生徒質問でのランダム方式の試行

### ウ 多様な児童・生徒の把握

### エ 結果公表の内容・スケジュールの改善

## 2 教科に関する調査結果

### (1) 全体の概要

#### ア 本市の平均正答数・平均正答率・平均IRTスコア結果概要

( )内は全国(公立)平均との差

	小学校			中学校		
教科	国語	算数	理科	国語	数学	理科CBT
平均正答数	9.9/14 (+0.5)	10.2/16 (+0.9)	10.2/17 (+0.5)	8.0/14 (+0.4)	8.4/15 (+1.2)	
平均正答率	70% (+3.2)	64% (+6.0)	60% (+2.9)	57% (+2.7)	56% (+7.7)	
平均IRTスコア						517 (+14.0)

※「IRTスコア」について

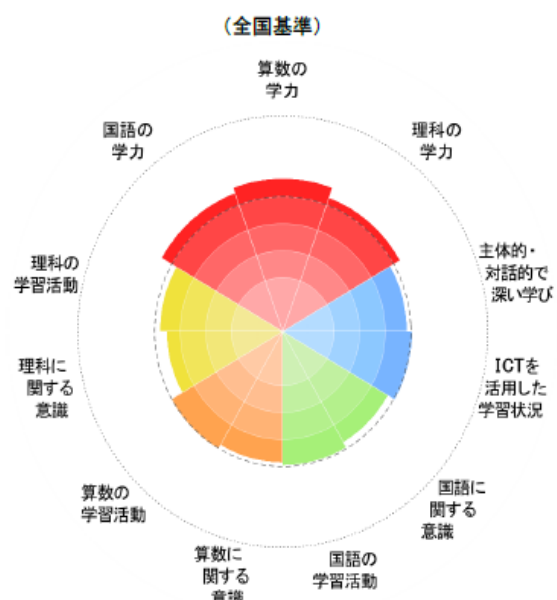
IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、令和7年度においては503を基準にした得点を表すもの。

「IRT」とは、「Item Response Theory」の略で、項目反応理論のこと。児童・生徒の正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童・生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童・生徒の学カスコアを推定する統計理論。なお、児童・生徒に対する個人の結果は、「IRTバンド」で表示・返却されています。「IRTバンド」とは、IRTスコアを1~5の5段階に区切ったもの。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドです。

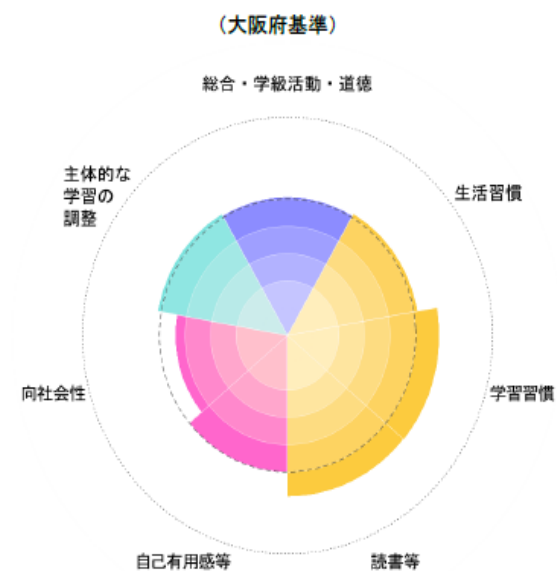
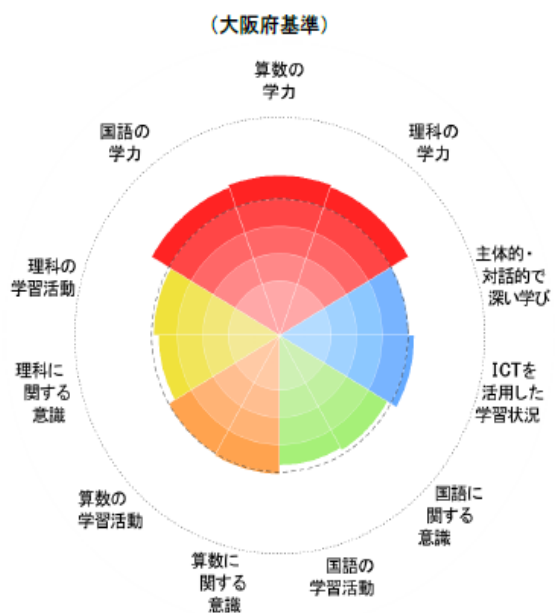
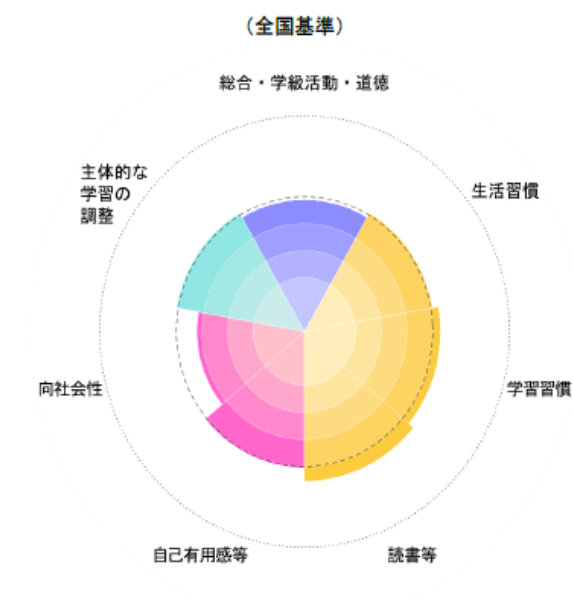
## イ 本市の調査結果チャート

### (ア) 小学校

#### [教科を中心とした学力・学習状況]



#### [その他の学力・学習状況（学習習慣、自己有用感等）]



a 「教科を中心とした学力・学習状況」について

全国基準と比較すると、各教科の「学力」は上回る結果となり、各教科に関する「意識」及び「主体的・対話的で深い学び」は下回る結果となりました。

「国語に関する意識」が全国基準を下回っている要因は、「国語の勉強は好きですか。」という質問に対する肯定的回答が55.4%で全国基準を2.9ポイント下回ったこと、「算数に関する意識」が全国基準を下回っている要因は、「算数の勉強は好きですか。」という質問に対する肯定的回答56.1%で全国基準を1.8ポイント下回ったことであると考えられます。「理科に関する意識」が全国基準を下回った要因は、児童質問調査における「理科に関する意識」に関する質問5つのうち、4つの質問において肯定的回答が全国基準を1～5.9ポイント下回ったことであると考えられます。

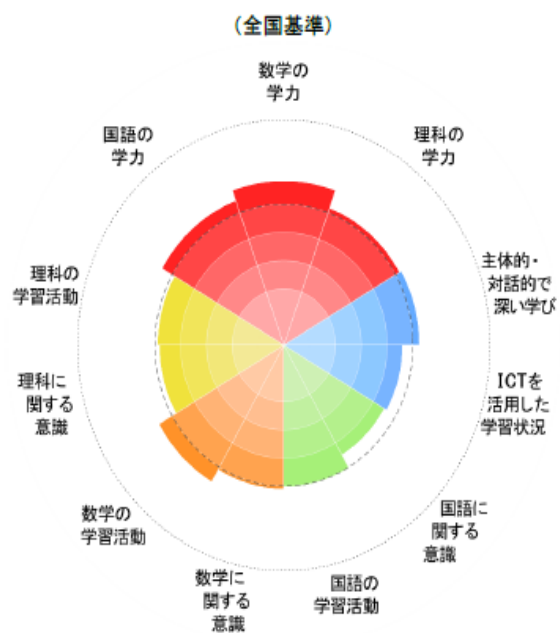
「主体的・対話的で深い学び」が全国基準を下回った要因は、「主体的・対話的で深い学び」に関する質問7つのうち、5つの質問において肯定的回答が全国基準を0.6～3.4ポイント下回ったことであると考えられます。しかしながら、「これまでに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。」という質問に対する肯定的回答については71.5%であり、全国基準を2.9ポイント上回る結果となりました。

b 「その他の学力・学習状況(学習習慣、自己有用感等)」について

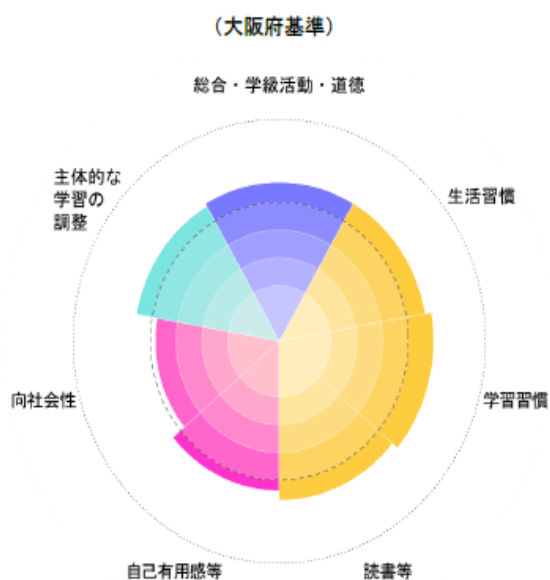
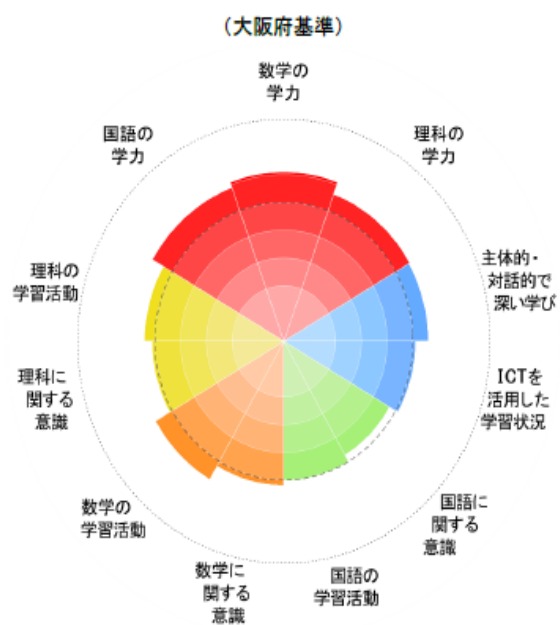
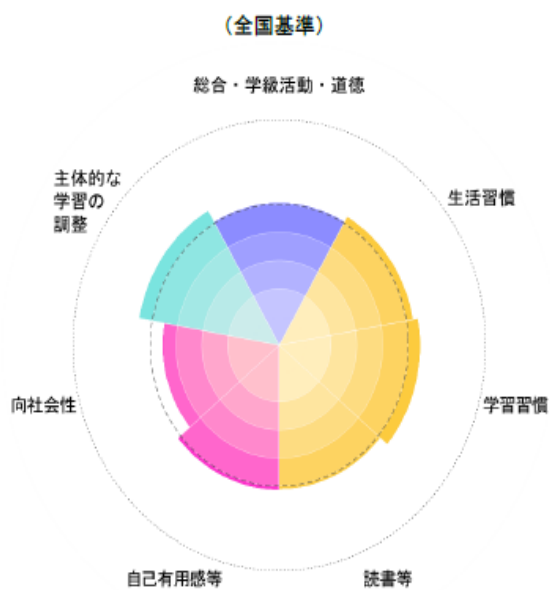
「向社会性」をみとる児童質問調査における4つの質問のすべてにおいて肯定的回答が全国基準を下回る結果となりました。4つの質問に対する肯定的回答を全国基準と比較すると「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」という質問で5ポイント、「人が困っているときは、進んで助けていますか。」という質問で2.7ポイント、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。」という質問で1.7ポイント、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」という質問で1ポイント下回っています。

## (イ) 中学校

[教科を中心とした学力・学習状況]



[その他の学力・学習状況（学習習慣、自己有用感等）]





α 「教科を中心とした学力・学習状況」について

全国基準と比較すると、各教科の「学力」は上回る結果となり、「国語に関する意識」、「理科に関する意識」及び「ICTを活用した学習状況」は下回る結果となりました。

「国語に関する意識」が全国基準を下回った要因は、生徒質問調査における「国語に関する意識」に関するすべての質問の肯定的回答が全国基準を4～5.2ポイント下回ったことであると考えられます。「理科に関する意識」が全国基準を下回った要因は、生徒質問調査における「理科の勉強は好きですか。」という質問に対する肯定的回答が58.9%で全国基準を4.9ポイント下回ったことであると考えられます。一方、「将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたいと思いますか。」という質問に対する肯定的回答は25%で全国基準を3.3ポイント上回る結果でした。

「ICTを活用した学習状況」が全国基準を下回った要因は、「1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。」という質問において、「ほぼ毎日（1日の複数の授業で使用）」「ほぼ毎日（1日に1回くらいの授業）」の回答率が31.4%であり、全国基準を21.8ポイント下回ったことであると考えられます。

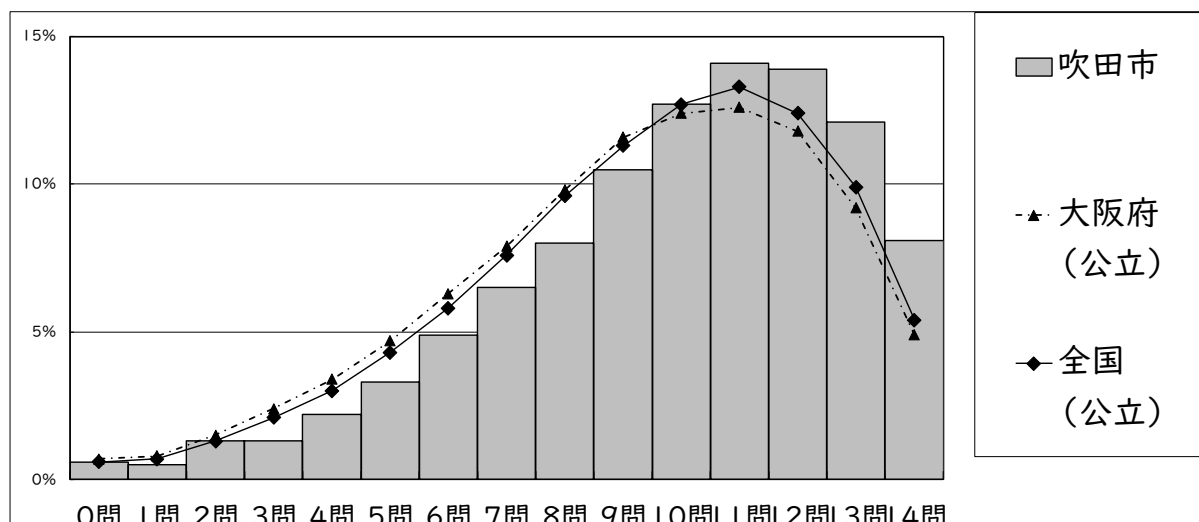
β 「その他の学力・学習状況（学習習慣、自己有用感等）」について

小学校と同様に、「向社会性」をみとる生徒質問調査における4つの質問のすべてにおいて肯定的回答が全国基準を下回る結果となりました。4つの質問に対する肯定的回答を全国基準と比較すると「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。」という質問で3.8ポイント、「人が困っているときは、進んで助けていますか。」という質問で1.5ポイント、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。」という質問で1.7ポイント、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか。」という質問で1.2ポイント下回っています。

## (2) 各教科の概要

### ア 小学校・国語

#### (ア) 正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



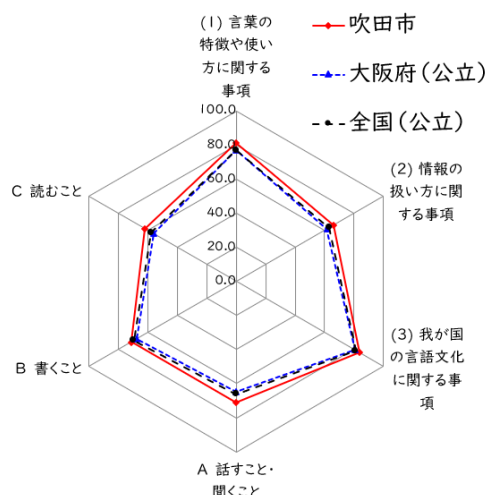
	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
吹田市	3,338	9.9/14	70
大阪府(公立)	62,895	9.2/14	65
全国(公立)	936,137	9.4/14	66.8

#### (イ) 分類・区別集計結果

※「対象問題数」が「設問なし」の場合、「平均正答率」は空欄

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				吹田市	大阪府(公立)	全国(公立)
全体			14	70	65	66.8
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方にに関する事項	2	81.2	77.0	76.9
		(2) 情報の扱い方にに関する事項	1	66.0	61.5	63.1
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	83.6	80.3	81.2
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	71.0	65.0	66.3
		B 書くこと	3	71.2	67.1	69.5
		C 読むこと	4	61.8	56.1	57.5
評価の観点		知識・技能	4	78.0	73.9	74.5
		思考・判断・表現	10	67.3	62.1	63.8
		主体的に学習に取り組む態度	設問なし			
問題形式		選択式	9	68.7	63.4	64.7
		短答式	3	82.4	78.2	78.5
		記述式	2	60.0	55.7	58.8

#### (ウ) 学習指導要領の領域の平均正答率の状況



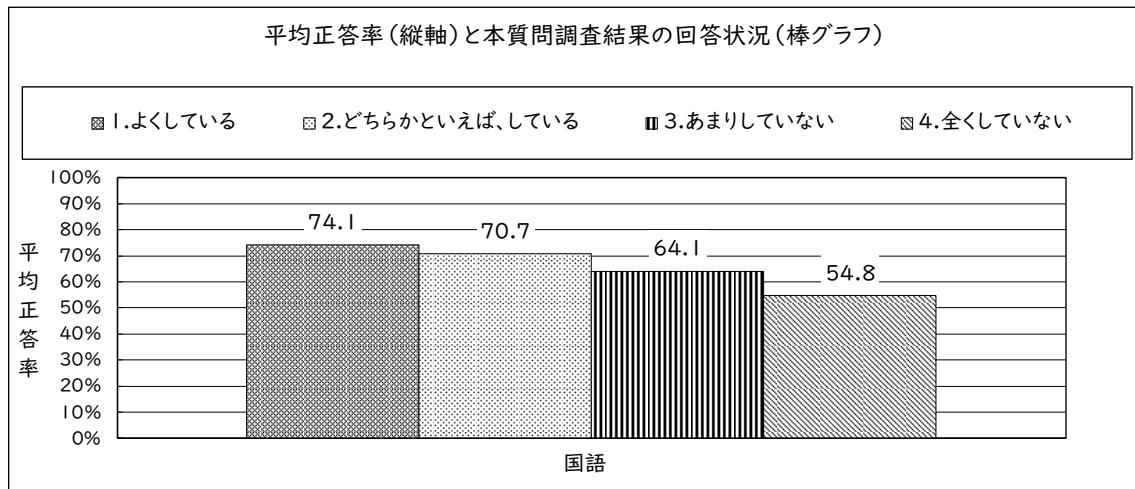
## (エ) 問題別集計結果

問題 番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)		
			選 択 式	短 答 式	記 述 式	吹 田 市	(大 公 立 府)	(全 公 立)	吹 田 市	(大 公 立 府)	(全 公 立)
1一	【話し合いの様子】における小森さんの傍線部の発言を説明したものとして適切なものを選択する	目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる	○			61.1	52.0	53.3	0.7	0.6	0.5
1二	【話し合いの記録】の書き表し方を説明したものとして適切なものを選択する	情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかをみる	○			66.0	61.5	63.1	0.7	0.5	0.5
1三 (1)	【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部アのように発言した目的として適切なものを選択する	自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかどうかをみる	○			73.9	69.9	71.8	0.7	0.6	0.6
1三 (2)	【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部イのように発言した理由として適切なものを選択する	話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	○			77.9	73.2	73.7	0.7	0.6	0.6
2一	【ちらし】の文章の構成の工夫を説明したものとして適切なものを選択する	書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができるかどうかをみる	○			67.3	63.3	65.5	1.0	0.9	0.8
2二	山田さんが手ぬぐいの模様について言葉と図で説明した理由として適切なものを選択する	図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	○			84.9	80.3	81.8	1.1	0.9	0.8
2三	【ちらし】の二重傍線部を、【調べたこと】を基に詳しく書く	目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる			○	61.2	57.7	61.3	4.3	5.4	5.0
2四ア	【ちらし】の下線部アを、漢字を使って書き直す (このみ)	学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる		○		85.4	82.1	81.6	5.9	6.9	7.2
2四イ	【ちらし】の下線部イを、漢字を使って書き直す (あつい日)			○		77.1	71.9	72.1	3.4	4.2	4.3
3一	【資料1】を読んで思い出した【木村さんの経験】を通して、木村さんが気付いたこととして適切なものを選択する	時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができるかどうかをみる	○			83.6	80.3	81.2	1.7	1.5	1.3
3二 (1)	【木村さんのメモ】の空欄アに入る適切な言葉を【資料2】の中から書き抜く	時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができるかどうかをみる		○		84.8	80.5	81.6	3.1	3.2	2.9
3二 (2)	【資料3】を読み、【木村さんのメモ】の空欄イに当てはまる内容として適切なものを選択する	事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる	○			56.2	49.4	51.3	2.8	2.5	2.4
3三 (1)	【話し合いの様子】の田中さんの発言の空欄Aに当てはまる内容として適切なものを選択する	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる	○			47.2	40.7	40.8	3.8	3.5	3.4
3三 (2)	【資料1】を読み返して言葉の変化について自分が納得したことを、【資料2】、【資料3】、【資料4】に書かれていることを理由にしてまとめて書く	目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる			○	58.9	53.6	56.3	15.2	16.5	16.2

## （オ） 児童質問調査との関連

### α 質問番号(50)

「国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたりくわしく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書いている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「よくしている」と回答している児童は、「全くしていない」と回答している児童の平均正答率より約19ポイント高くなっています。このことから、自分の考えを伝えるために試行錯誤することが大切であり、その過程の中で自分の考えを構造化し、不要な情報を削ぎ落したり必要な情報を付け足したりしながら、それぞれの因果関係を意識することが、論理的な文章が書ける力につながると考えられます。

【問題2三】「チラシの二重傍線部を、調べたことをもとに詳しく書く」において、正答率が全国平均よりも若干下回っています。これは、「目的や意図に応じて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する」ことに課題があることを示しています。しかし、無解答率が比較的低いことや、【問題2二】(図表を使って自分の考えを表すと伝わりやすいことを答える問題)の正答率が高いことから、「自分の考えを伝える」ということに関しての一定の理解はあることがうかがえます。

この結果から、本市小学校の授業において、「自分の考えを伝える」ということについて、これまでの取組の成果は見られるものの、それが「どう伝わっているか」「その伝え方で良かったのか」というような「他者意識」を持たせる取組みに課題があることを示しています。

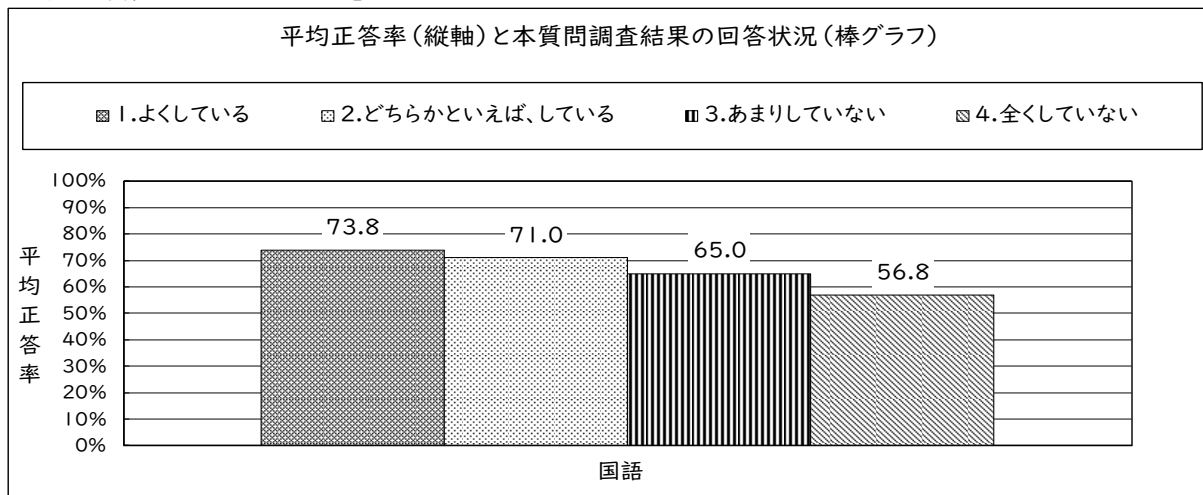
#### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、言語活動を重視し思考力を高める取組みを継続しつつ、自分の考えを伝える際に一度立ち止まり、伝える相手のことを考えたり、制限時間や字数を意識したりする活動に取組むとともに、フィードバックをする時間を確保するなどの取組が有効です。

これらは、国語の授業だけでなく、他教科の活動にも広げ、「相手にうまく伝えるにはどうすればいいか」を常に考える習慣をつけることが必要です。

## b 質問番号(51)

「国語の授業で、目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けている」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「よくしている」と回答した児童の平均正答率は73.8%で、「全くしていない」と回答した児童より17ポイント高くなっています。これは、文章と図表の表現形式の違いを理解し、情報を整理する中で必要な部分を見つけることができる力をつけることが、学力向上につながる重要なポイントであると言えます。

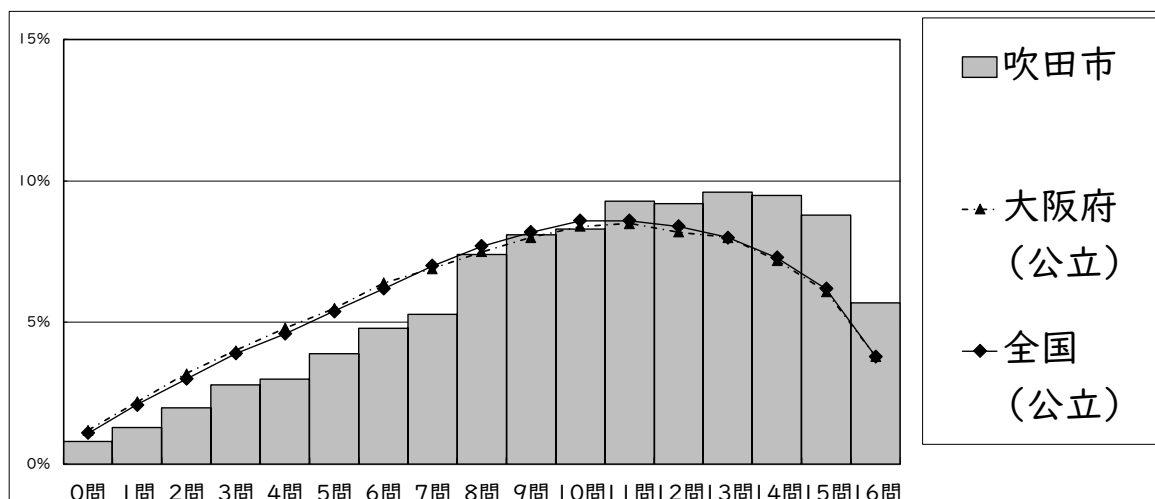
【問題3三(1)】「話し合いをしている中での発言の空欄にあてはまる内容を選択する」において、本市の正答率は47.1%、無解答率は3.8%です。また、【問題3三(2)】「資料1を読み返して、言葉の変化について自分が納得できたことを、資料2、資料3、資料4に書かれていることを理由にしてまとめて書く」における本市の正答率は58.9%で、無解答率は15.2%です。これらの正答率は全国平均より高い数値ではありますが、他の設問と比較すると低くなっています。このことは、「文章や図表などの様々な種類の情報を、目的に応じて整理する力」と「整理した情報を自分の考えを結びつけ、論理的な文章を書く力」に課題があることを示しています。また、「他者の意見に納得する」ということが「その意見の根拠や理由を理解し、それが自分の価値観や事実認識と照らして筋が通っていると感じること」であるということが理解できていないとも考えられます。

### <今後の具体的な方策、支援等>

この結果から、本市小学校の授業において、「様々な種類の情報を、目的に応じて整理する」、「自分の考えを、整理した情報に基づいて相手に伝えるように述べる」、「他者の意見を正しく理解するとともに、その裏付けとなる理由や根拠を確認し、自分の考えと比較する」といった活動が必要であると考えられます。調べたことの成果発表などは本市でも積極的に実施していますが、ただ発表するのではなく、発表までの過程を大事にしなければなりません。「自分の考え」に客観的な事実としての整理された情報をどれだけ結び付けられているか、よりよく伝えるために言葉を選んでいるか、他者の発表を聞く際も、発表者の意図を正しく理解し、その裏付けとなる根拠を確認しているかを自ら振り返る習慣をつけるように指導することが重要です。

# イ 小学校・算数

## (ア) 正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
吹田市	3,343	10.2/16	64
大阪府(公立)	62,960	9.2/16	58
全国(公立)	936,399	9.3/16	58.0

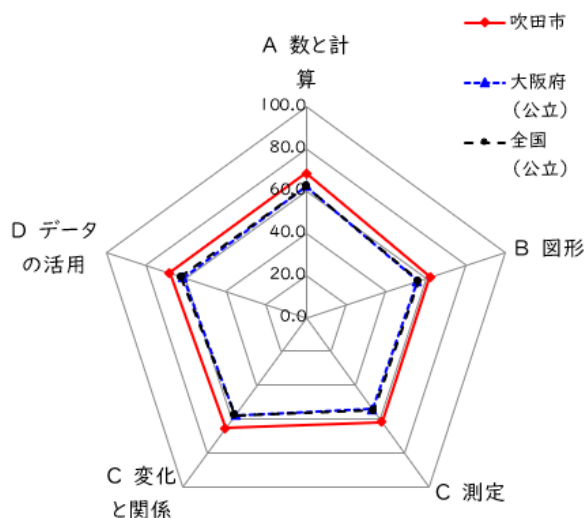
## (イ) 分類・区別集計結果

※「対象問題数」が「設問なし」の場合、「平均正答率」は空欄

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			吹田市	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		16	64	58	58.0
学習指導要領の領域	A 数と計算	8	68.7	62.4	62.3
	B 図形	4	62.2	55.7	56.2
	C 測定	2	61.5	53.8	54.8
	C 変化と関係	3	65.1	57.3	57.5
	D データの活用	5	68.3	61.5	62.6
評価の観点	知識・技能	9	71.0	65.1	65.5
	思考・判断・表現	7	54.7	47.9	48.3
	主体的に学習に取り組む態度	設問なし			
問題形式	選択式	6	72.7	66.8	67.2
	短答式	6	69.7	63.8	64.0
	記述式	4	41.7	34.3	34.9

※「学習指導要領の領域」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、各区分の問題数を合計した数は「全体」の問題数とは一致しない。

## (ウ) 学習指導要領の領域の平均正答率の状況



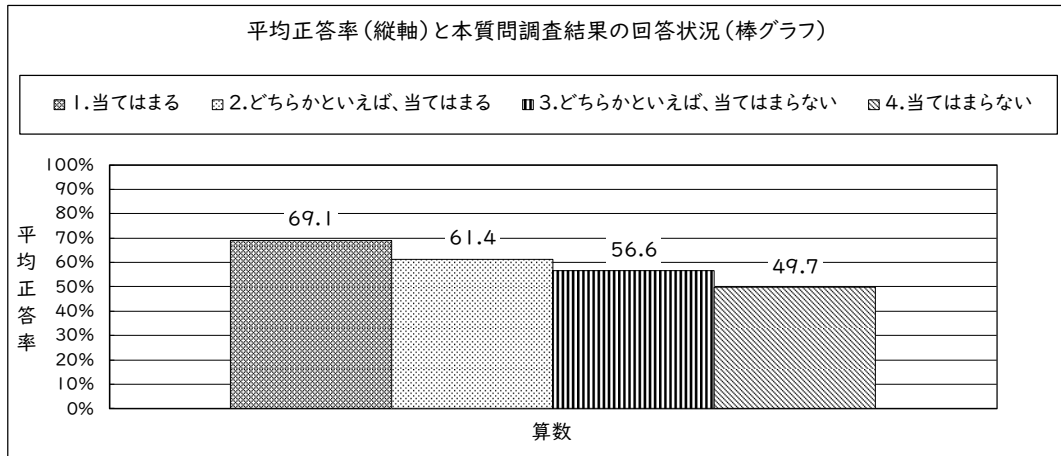
## (エ) 問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)		
			選 択 式	短 答 式	記 述 式	吹 田 市	(大 公 阪 立 府 )	(全 公 立 )	吹 田 市	(大 公 阪 立 府 )	(全 公 立 )
1(1)	2022年の全国のブロッコリーの出荷量が2002年の全国のブロッコリーの出荷量の約何倍かを、棒グラフから読み取って選ぶ	棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができかどうかをみる	○			85.5	78.7	78.7	0.4	0.4	0.4
1(2)	都道府県Aのブロッコリーの出荷量が増えたかどうかを調べるために、適切なグラフを選び、出荷量の増減を判断し、そのわけを書く	目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる			○	35.0	28.6	31.0	0.9	0.9	0.9
1(3)	示された表から、「春だいこん」や「秋冬だいこん」より「夏だいこん」の出荷量が多い都道府県を選ぶ	簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができるかどうかをみる	○			75.0	69.6	71.6	3.1	4.1	3.5
1(4)	示された資料から、必要な情報を選び、ピーマン1個とブロッコリー4個の重さを求める式と答えを書く	示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算することができるかどうかをみる		○		79.7	74.4	74.5	1.9	2.7	2.6
2(1)	示された平行四辺形をかくために、コンパスの開く長さを書き、コンパスの針を刺す場所を選ぶ	平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかをみる		○		64.0	57.6	58.3	0.9	1.2	1.2
2(2)	方眼上の五つの図形の中から、台形を選ぶ	台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる	○			56.9	50.4	50.2	0.6	0.7	0.7
2(3)	角をつくる二つの辺をそれぞれのばした図形の角の大きさについてわかることを選ぶ	角の大きさについて理解しているかどうかをみる	○			82.9	78.4	79.3	0.9	1.0	1.0
2(4)	五角形の面積を求めるために五角形を二つの図形に分割し、それぞれの図形の面積の求め方を書く	基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる			○	45.0	36.6	37.0	2.0	2.7	2.7
3(1)	0.4+0.05について、整数の加法で考えるときの共通する単位を書く	小数の加法について、数の相対的な大きさを用いて、共通する単位を捉えることができるかどうかをみる		○		79.5	73.8	74.1	2.0	3.0	2.8
3(2)	$\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ について、共通する単位分数と、 $\frac{3}{4}$ と $\frac{2}{3}$ が、共通する単位分数の幾つ分になるかを書く	分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる			○	27.8	23.5	23.0	12.7	15.4	15.7
3(3)	数直線上に示された数を分数で書く	数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる		○		43.9	35.4	35.0	7.0	7.9	7.8
3(4)	$\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ を計算する	異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる		○		87.3	82.5	81.3	3.5	4.2	4.1
4(1)	新品のハンドソープが空になるまでに何プッシュすることができるのかを調べるために、必要な事柄を選ぶ	伴って変わる二つの数量の關係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかをみる	○			87.1	82.1	82.8	2.8	2.6	2.6
4(2)	使いかけのハンドソープがあと何プッシュすることができるのかを調べるために、必要な事柄を判断し、求め方を書く	伴って変わる二つの数量の關係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる			○	59.1	48.4	48.7	2.6	3.6	3.4
4(3)	はかりが示された場で、はかりの目盛りを読む	はかりの目盛りを読むことができるかどうかをみる		○		64.0	59.2	60.9	3.7	4.4	4.2
4(4)	10%増量したつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選ぶ	「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる	○			49.1	41.5	40.9	3.6	4.2	4.1

## (オ) 児童質問調査との関連

### α 質問番号(56)

「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した児童は、「当てはまらない」と回答した児童より平均正答率が19.4ポイント上回っています。これは、生活の中で活用することで、ただの公式暗記ではなく、抽象的な概念を「具体物」としてイメージできるようになり、そのことが「理解」につながり、長期記憶として残りやすいと考えられるからです。

【問題1(2)】「ブロッコリーの出荷量が増えたかどうかを調べるために適切なグラフを選ぶ」問題の正答率は35%、【問題4(4)】「10パーセント増量したハンドソープの量は、増量前の何倍にあたるかを考える」の正答率は49.1%と、全国平均よりも高い値を示しておりますが、他の問題に比べて正答率は低くなっています。これらは、普段の生活や、他教科の学習でも経験することであることから、算数の学習と普段の生活での事柄が児童の中で結びついておらず、学習内容が十分に活用できていない状況であると考えられます。

#### <今後の具体的な方策、支援等>

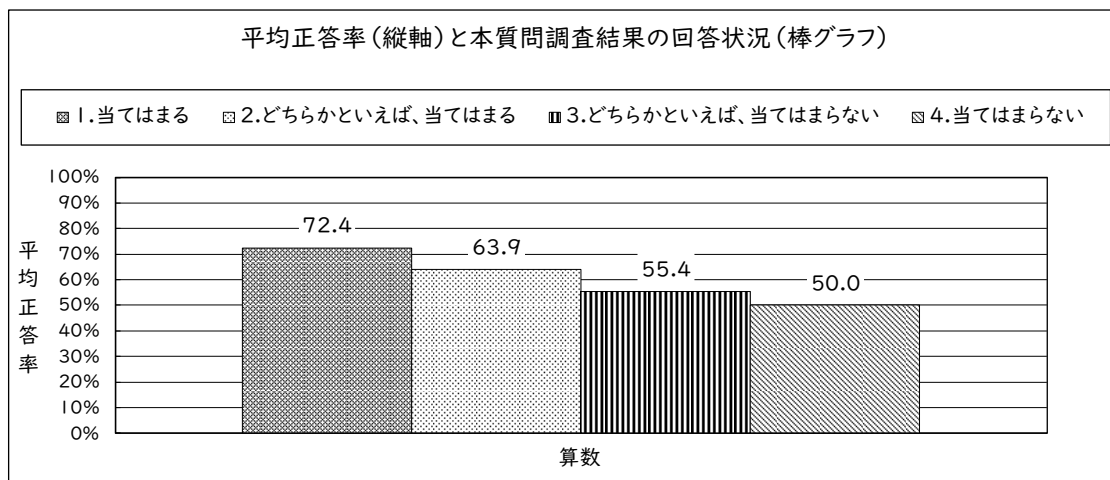
この結果から、本市の授業において、授業内容と普段の生活を結びつけるような活動をより充実させる必要があると考えられます。教科書の内容を網羅するだけではつかない、実践力・活用力をつけるための授業改善が必要です。

そのためには、学習の目的を生活場面とリンクして提示したり、生活の中で学習内容を活用する場面を想起できるような発問をしたり、振り返りの時間で活用場面を考えさせたりするなど、教員が「授業の外の世界」と児童を結びつける視点を意識した授業を行うことも大切です。カリキュラム・マネジメントの視点から他教科との関連性を高められるよう単元を構成したりするなど、児童の実態に即した教育課程を編成する必要があります。



## b 質問番号(58)

「算数の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した児童は、「当てはまらない」と回答した児童に比べて、平均正答率が22.4ポイント上回っています。これは、自分の考え方を説明する活動が思考力を深め理解を助ける学習になっているからだと考えられます。説明するためには手順や理由を順序だてて整理しなければなりません、その過程で曖昧だった部分が明確になるとともに、論理のつながりを意識できるようになります。

【問題2(4)】「五角形の面積を求める際に2つの図形に分割し、それぞれの図形の面積の求め方を書く」において、本市の正答率は全国平均より高いものの、45%と半分以下となっています。また、【問題3(2)】「異分母の2つの分数に共通する単位分数を見つけ、それぞれそれぞれのいくつ分にあたるのかを考え、図や式で説明する」においては、正答率27.8%、無解答率は12.7%と、算数の中で、最も低い正答率であり、無解答率が最も高い問題でした。【問題3(4)】「異分母の加法」においては正答率87.3%と高いことから、一定の知識技能は備わっているが、なぜそうなるかを説明することができていない児童が多いと考えられます。

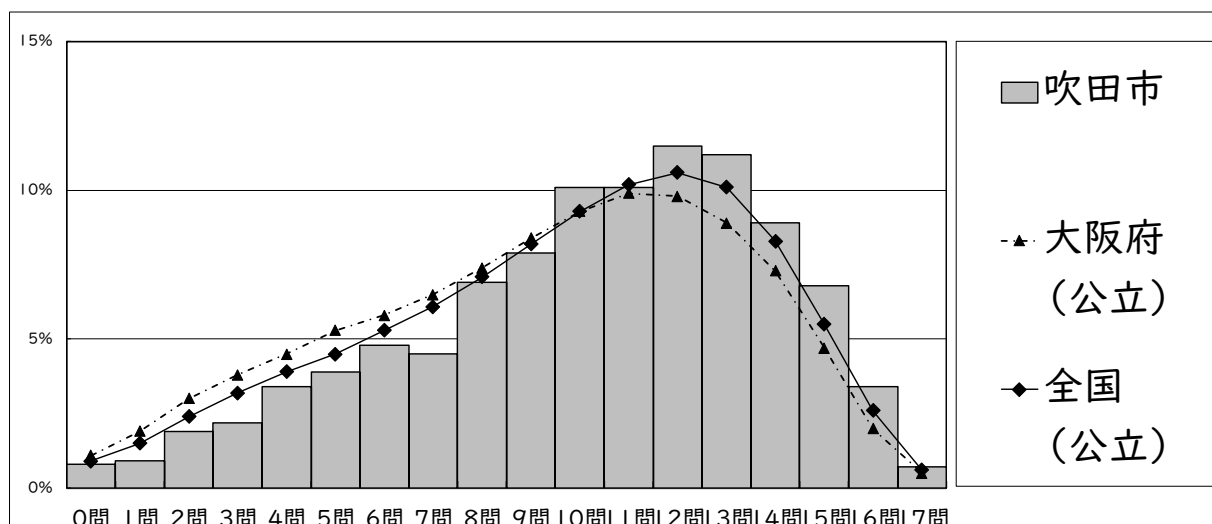
### <今後の具体的な方策、支援等>

この結果から、本市の授業において、課題を解決する際に自分はどう考えたのか、ということを説明する機会を増やす必要があります。教員が主体となり一部の児童の発言を取り上げて授業を進めるのではなく、児童一人ひとりが自分の考えを述べ、それをフィードバックする時間を確保することが大切です。

今後は、自分の考えを述べる時間を確保するための授業改善を進め、小グループに分けて伝え合う場面を作ったり、伝えられた児童がその考えの評価をしたりするなど、個別最適な学びの充実を図ることが重要です。その中で、思考ツールを使って自分の考えを整理したり、他者の意見を取り入れたりすることの重要性に気づかせ、積極的にそれらを活用しながら自分の考えを説明できる力をつけていくことが、理解をより深めることにつながります。

ウ 小学校・理科

(ア) 正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
吹田市	3,342	10.2/17	60
大阪府(公立)	63,086	9.3/17	55
全国(公立)	936,576	9.7/17	57.1

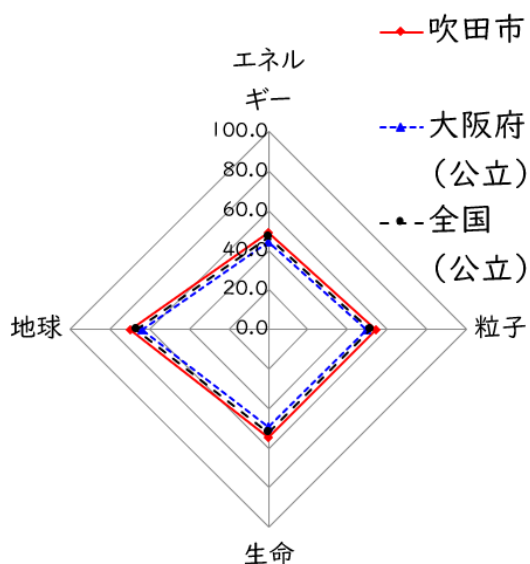
(イ) 分類・区別集計結果

※「対象問題数」が「設問なし」の場合、「平均正答率」は空欄

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				吹田市	大阪府(公立)	全国(公立)
全体			17	60	55	57.1
学習指導要領 の区分・領域	A区分	「エネルギー」を柱とする領域	4	48.6	43.9	46.7
		「粒子」を柱とする領域	6	54.3	49.4	51.4
	B区分	「生命」を柱とする領域	4	54.6	49.0	52.0
		「地球」を柱とする領域	6	69.8	63.9	66.7
評価の観点		知識・技能	8	57.6	52.7	55.3
		思考・判断・表現	9	62.2	56.2	58.7
		主体的に学習に取り組む態度	設問なし			
問題形式		選択式	11	57.9	52.4	54.7
		短答式	4	72.6	66.8	69.7
		記述式	2	46.8	41.6	45.2

※「学習指導要領の領域」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、各区分の問題数を合計した数は「全体」の問題数とは一致しない。

(ウ) 学習指導要領の領域の平均正答率の状況



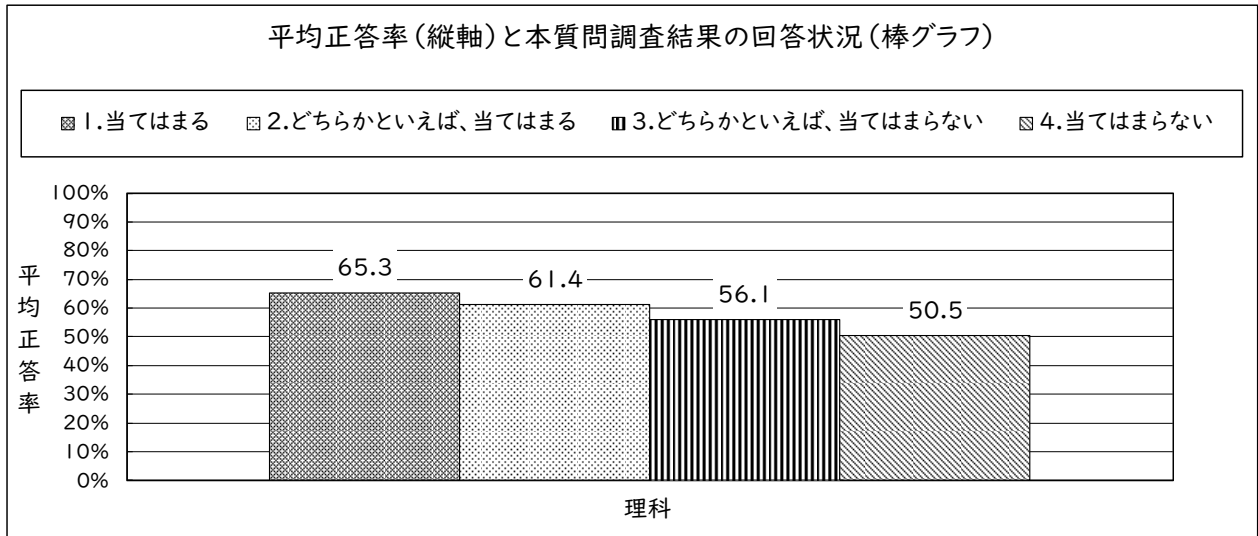
(エ) 問題別集計結果

問題 番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)		
			選 択 式	短 答 式	記 述 式	吹 田 市	(大 公 立 府)	(全 公 立 国)	吹 田 市	(大 公 立 府)	(全 公 立 国)
1(1)	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込む時間の違いを調べる実験の条件について、コップAの土の量と水の量から、コップBの条件を書く	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる		○		83.2	76.2	79.5	3.1	3.1	2.5
1(2)	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いをまとめたわけについて、結果を用いて書く	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる			○	64.5	57.7	60.5	8.5	9.9	8.5
1(3)	【結果】や【問題に対するまとめ】から、中くらいの粒の赤玉土に水がしみ込む時間を予想し、予想した理由とともに選ぶ	赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができるかどうかをみる	○			81.2	75.9	77.8	1.0	1.1	0.9
2(1)	アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるか、それぞれの性質に当てはまるものを選ぶ	身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる	○			11.2	9.9	10.6	0.8	0.7	0.6
2(2)	電気を通す物と通さない物でできた人形について、人形Aの剣を人形Bに当てたときだけ、ベルが鳴る回路を選ぶ	電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる	○			46.1	40.1	42.9	0.7	0.8	0.6
2(3)	ベルをたたく装置の電磁石について、電流がつくる磁力を強めるため、コイルの巻数の変え方を書く	電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いているかどうかをみる		○		83.2	75.9	78.0	2.5	3.1	2.7
2(4)	乾電池2個のつなぎ方について、直列につなぎ、電磁石を強くできるものを選ぶ	乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いているかどうかをみる	○			53.8	49.7	55.1	0.9	0.9	0.8
3(1)	ヘチマの花のおしべとめしべについて選び、受粉について書く	ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる		○		70.4	66.0	70.7	1.5	1.7	1.5
3(2)	ヘチマの花粉を顕微鏡で観察するとき、適切な像にするための顕微鏡の操作を選ぶ	顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いているかどうかをみる	○			52.0	46.1	45.6	1.2	1.0	0.8
3(3)	ヘチマの種子が発芽する条件を調べる実験において、条件を制御した解決の方法を選ぶ	発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる	○			67.0	58.4	62.0	1.6	2.0	1.7
3(4)	レタスの種子の発芽の結果から、てるみさんの気付きを基に、見いだした問題について書く	レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができるかどうかをみる			○	29.0	25.6	29.9	11.1	12.9	11.4
4(1)	水の温まり方について、問題に対するまとめをいうために、調べる必要があることについて書く	水の温まり方について、問題に対するまとめを導き出す際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるかどうかをみる		○		53.7	49.2	50.6	5.6	6.6	6.1
4(2)イウ	水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ	水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる	○			63.7	60.6	64.2	1.2	1.4	1.3
4(2)エオ	水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ	水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる	○			61.7	54.1	57.5	1.5	1.6	1.5
4(3)カ	海にある氷がとけることについて、水が氷に変わる温度を根拠に予想しているものを選ぶ	水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる	○			66.0	58.6	59.8	2.4	2.5	2.3
4(3)キ	水が陸から海へ流れていくことについて、水の行方と関連付けているものを選ぶ	水がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかどうかをみる	○			64.4	59.0	60.9	2.7	2.7	2.4
4(3)ク	海面水位の上昇について、水の温度による体積の変化を根拠に予想しているものを選ぶ	「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる	○			69.2	63.8	65.6	2.5	2.7	2.5

## （オ） 児童質問調査との関連

### α 質問番号(66)

「自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した児童の理科の平均正答率は65.3%であり、「当てはまらない」と回答した児童の50.5%と比べて約15ポイント高い結果となっています。この結果から、様々な場面において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりしながら、児童が自ら課題を持ち、理科の見方・考え方を働かせることが、正答率の高さと関係があるということが考えられます。

【問題3(4)】「レタスの種子の発芽の結果から、てるみさんの気づきを基に、見いだした問題について書く」における本市の正答率は29.0%と他の問題に比べて低い結果であり、無解答率も11.1%と高い結果でした。この問題は、他の実験結果での気づきを基に、見いだした問題について表現できるかどうかを問うものであり、「理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりする」力が問われています。

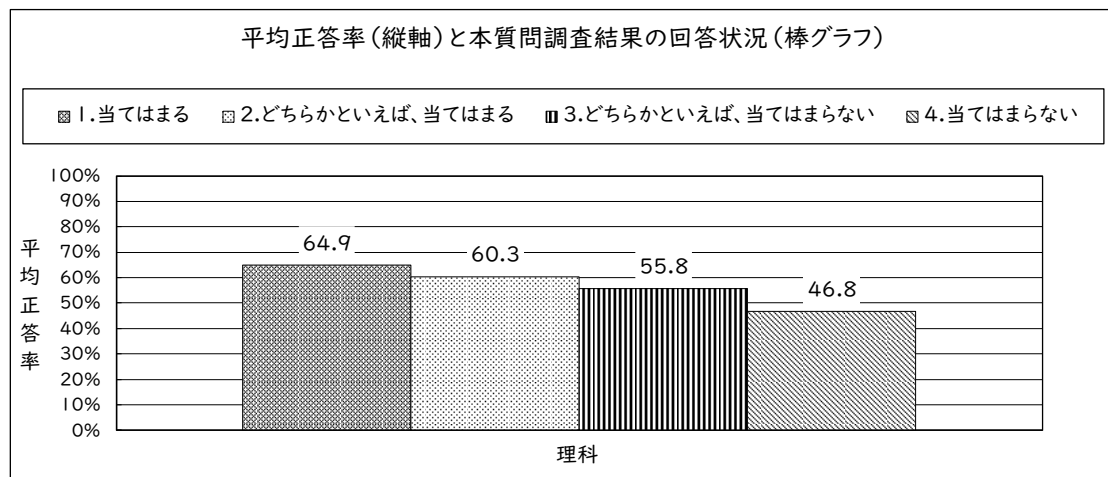
本市の授業においては、「自ら問いをもつ」学習をめざして、授業改善が推進されています。しかし、児童にとっては「答えが1つ」で知識を問われる問題の方が安心できるため、学習に対して受け身になってしまう場面も少なくありません。児童が自ら、自然の事物・現象を比較し、差異点や共通点を基に問題を見だし、表現する力を身につけることが大切です。

#### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、複数の自然の事物・現象を比較し、差異点や共通点を捉え、新たな問題を見いだしていくことの重要性について意識して、授業改善をより推進するとともに、児童が自ら問いを見いだす時間と環境を、学校でも家庭でも大事にすることが重要です。

## b 質問番号(70)

「理科の授業で、観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した児童の理科の平均正答率は64.9%であり、「当てはまらない」と回答した児童の46.8%と比べて約18ポイント高い結果となっています。この結果から、観察や実験等の学習活動を振り返り、批判的に捉えなおすような思考が、学力の定着に結びついていると考えられます。

【問題4(1)】「水の温まり方について、問題に対するまとめを作成するうえで、調べる必要があることについて書く」における本市の正答率は53.7%となっており、約半数の児童しか正答していないという結果でした。この問題は、水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるかどうかを問うものであり、「予想を基に解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、批判的に考え、表現する」力が求められています。

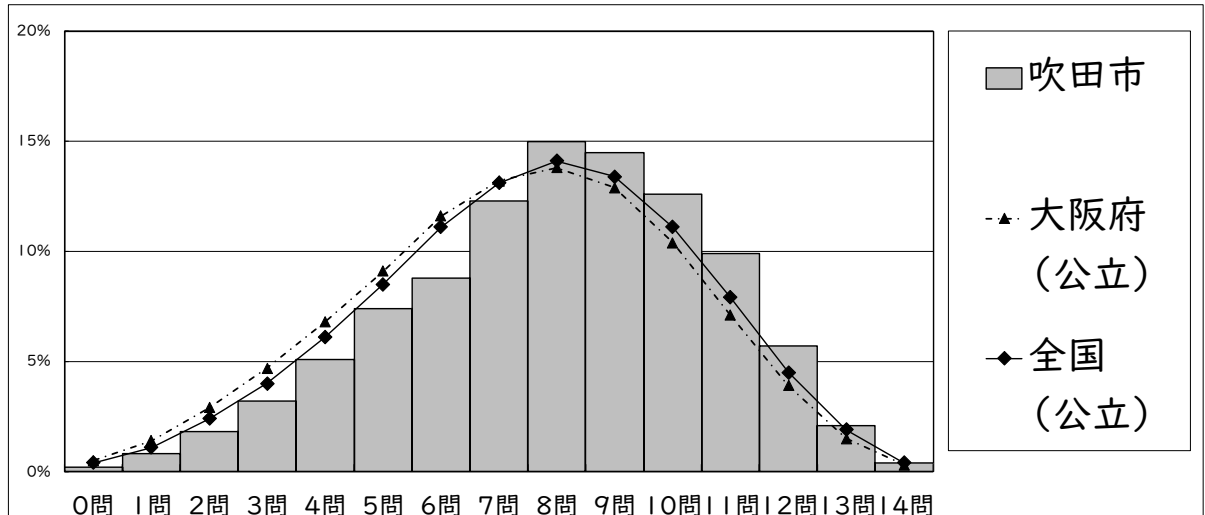
本市では、「批判的思考」の育成も大切にしており、情報があふれる時代に「本当かな？」と疑問を持ったり、「他に方法はあるかな？」と問いなおし考えたりする力は、問題を解決していくために欠かせません。しかしながら、予想したことを確かめる方法になっているか検討して、発想した解決の方法に対して、一度立ち止まって批判的に考えることの重要性を意識した授業改善については、まだ十分に研究の余地があり、課題の1つであると捉えています。

### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、実験や観察の方法が適切であったかを検討する力や、結果に基づいてまとめを導き出す力を意識して育成する理科の授業を推進していきます。そして、変化の大きい時代を生きる児童が、自らの人生を舵取りする力を身につけるために、「本当に大丈夫かな？」と自ら疑問を持って、再検討できるような思考力を育成することが重要です。

## エ 中学校・国語

### (ア) 正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



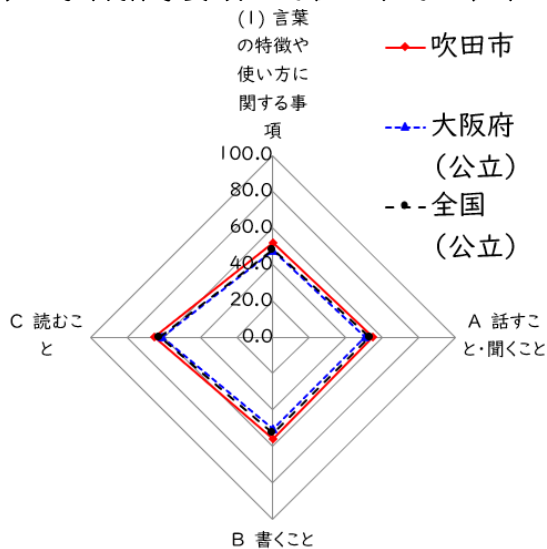
	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
吹田市	2,718	8.0/14	57
大阪府(公立)	58,455	7.3/14	52
全国(公立)	870,560	7.6/14	54.3

### (イ) 分類・区別集計結果

※「対象問題数」が「設問なし」の場合、「平均正答率」は空欄

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				吹田市	大阪府(公立)	全国(公立)
		全体	14	57	52	54.3
学習指導 要領の 内容	知識及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に 関する事項	2	51.7	47.8	48.1
		(2) 情報の扱い方に 関する事項	設問なし			
		(3) 我が国の言語文化に 関する事項	設問なし			
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	4	55.1	50.7	53.2
		B 書くこと	5	55.9	50.5	52.8
		C 読むこと	3	65.1	61.2	62.3
評価の観点	知識・技能		2	51.7	47.8	48.1
	思考・判断・表現		12	58.0	53.2	55.3
	主体的に学習に取り組む態度		設問なし			
問題形式	選択式		8	66.7	62.4	63.9
	短答式		2	78.1	72.6	73.6
	記述式		4	27.4	22.6	25.3

### (ウ) 学習指導要領の内容の平均正答率の状況



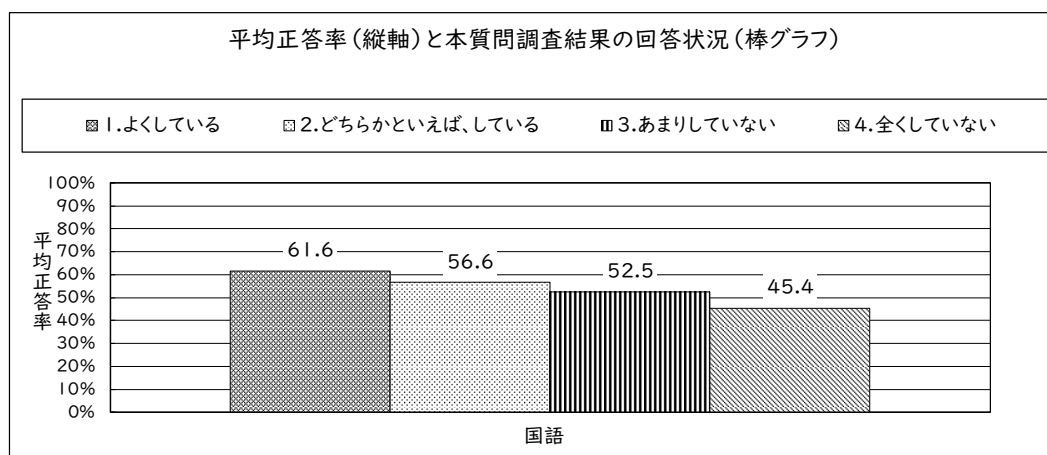
(エ) 問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)		
			選択式	短答式	記述式	吹田市	(大阪府立)	(全国公立)	吹田市	(大阪府立)	(全国公立)
1一	変換した漢字として適切なものを選択する(かいしん)	文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる	○			39.6	35.2	35.2	0.3	0.2	0.2
1二	ちらしに「会場図」を加えた目的を説明したものとして適切なものを選択する	目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる	○			83.7	81.2	82.5	0.2	0.2	0.2
1三	ちらしの中の情報について、示す位置を変えた意図を説明したものとして適切なものを選択する	書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考慮することができるかどうかをみる	○			66.7	59.4	63.3	0.4	0.4	0.5
1四	ちらしの読み手に向けて、今年の美術展の工夫について伝える文章を書く	自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる			○	32.3	27.8	31.0	2.0	2.1	1.6
2一	スライドを使ってどのように話しているのかを説明したものとして適切なものを選択する	資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる	○			38.6	36.7	38.1	0.4	0.4	0.3
2二	聞き手の反応を見て発した言葉について、そのように発言した理由を説明したものとして適切なものを選択する	相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる	○			79.9	75.6	77.9	0.3	0.4	0.3
2三	「話の順序を入れ替えた方がよい」という助言の意図を説明したものとして適切なものを選択する	自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することができるかどうかをみる	○			76.9	71.1	73.4	0.6	0.8	0.6
2四	発表のまとめの内容をより分かりやすく伝えるためのスライドの工夫について、どのような助言をするか、自分の考えを書く	資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる			○	25.1	19.5	23.2	3.6	4.9	4.0
3一	物語の始めに問かけが示されていることについて、その効果を説明したものとして適切なものを選択する	表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる	○			84.0	79.3	80.0	0.4	0.5	0.5
3二	「兄」と「弟」が、物語の中でどのような性格の人物として描かれているかを書く	文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができるかどうかをみる		○		91.7	88.6	89.9	3.2	5.2	4.0
3三	「しきりと」の意味として適切なものを選択する	事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる	○			63.8	60.5	61.0	0.5	0.8	0.8
3四	「一 榎木の実」に書かれている場面が、「二 釣の話」には書かれていないことによる効果について、自分の考えとそう考えた理由を書く	文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる			○	19.7	15.6	17.1	25.0	30.6	28.1
4一	手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する	読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる		○		64.4	56.7	57.3	26.3	33.2	33.5
4二	手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見付けて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く	読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる			○	32.3	27.4	30.1	14.5	20.6	19.1

## （オ） 生徒質問調査との関連

### α 質問番号(50)

「国語の授業で、文章を読み、その文章の構成や展開に、どのような効果があるのかについて、根拠を明確にして考えている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「よくしている」と回答した生徒の平均正答率は61.6%、「全くしていない」と回答した生徒の平均正答率は45.4%となっており、その差は16.2ポイントとなっています。

【問題3四】「『一 榎木の実』に書かれている場面が、『二 釣の話』には書かれていないことによる効果について、自分の考えとそのように考えた理由を書く」の出題の趣旨は、「文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうか」をみることであり、質問番号(50)との関連性が高い問題です。この問題の本市の正答率は19.3%と国語の全問題の中で一番低く、無解答率も25.0%と他の問題に比べ高い結果でした。このことから、文章の構造的特徴や効果を分析したり、その根拠を明確にして説明したりする力が十分に育っていないと考えられます。多くの場合、あらすじの理解や感想を持つことに留まっていることが推測され、本市生徒の全体的な課題であるといえます。

これは、授業における読解の過程で「なぜその文章の構成や展開になっているのか」を意識する機会が少ないことに起因していると考えられます。

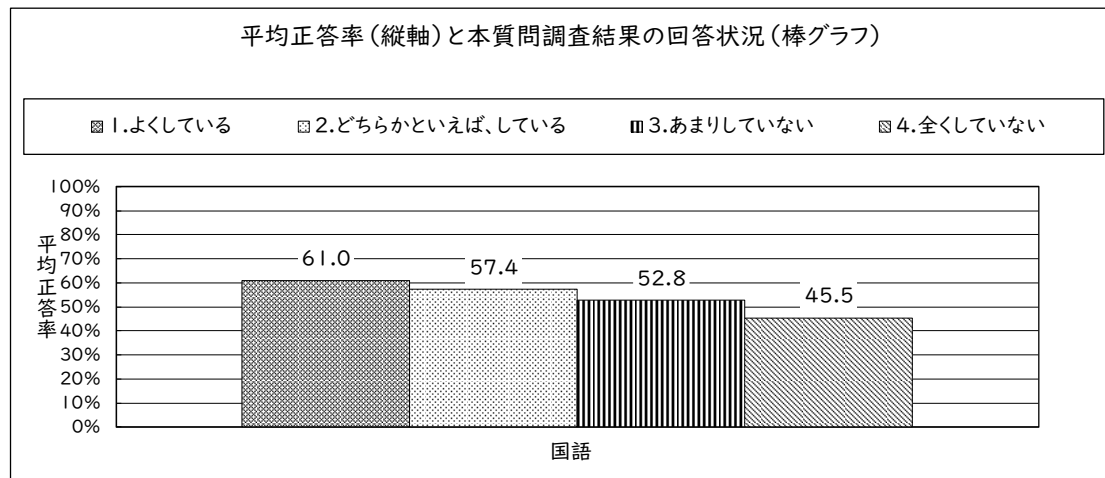
#### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、生徒が段落の役割や順序の意味を図で表したりノートにまとめたりして可視化し、文章の構造を把握する活動を、より丁寧に取り入れることが必要です。また、広告や記事等様々な文章で構成の効果を考えさせる小課題を設定し、根拠を明確にして説明させる時間をつくることも効果的です。その際、「効果+根拠(文中の語句や構造)」という答え方の型を共有した上で、生徒同士で相互説明する場を設けるとともに、生徒が根拠の明確さについて自ら振り返ることができるような工夫をすることが大切です。これらの学習活動を充実させ、生徒が文章構成の効果を的確に捉え、自らの考えを論理的に表現できる力の向上を図ることが重要です。



## b 質問番号(51)

「国語の授業で、文章を書いた後に、読み手の立場に立って読み直し、語句の選び方や使い方、文や段落の長さ、語順などが適切かどうかを確かめて文章を整えている」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「よくしている」と回答した生徒の平均正答率は61.0%であり、「全くしていない」と回答した生徒の平均正答率45.5%と比べ、約15ポイント高くなっています。このことから、文章を書いた後に読み直し、語句や語順、段落構成などを確認する「推敲」を行うことを習慣化することが、学力向上に繋がる重要な要素であると言えます。

【問題4二】「手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見付けて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く」における本市の正答率は32.3%と全国平均より高く、無解答率も14.5%と他の問題に比べ3番めに高い結果でした。これは、「読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整える力」に課題があることや推敲の習慣が十分に身に付いていないことを示しています。

この結果から、本市の授業において、推敲の方法を学ぶ時間や「相手に伝えるもの」として文章を書く活動の時間を十分に確保できていないことが背景にあると考えられます。

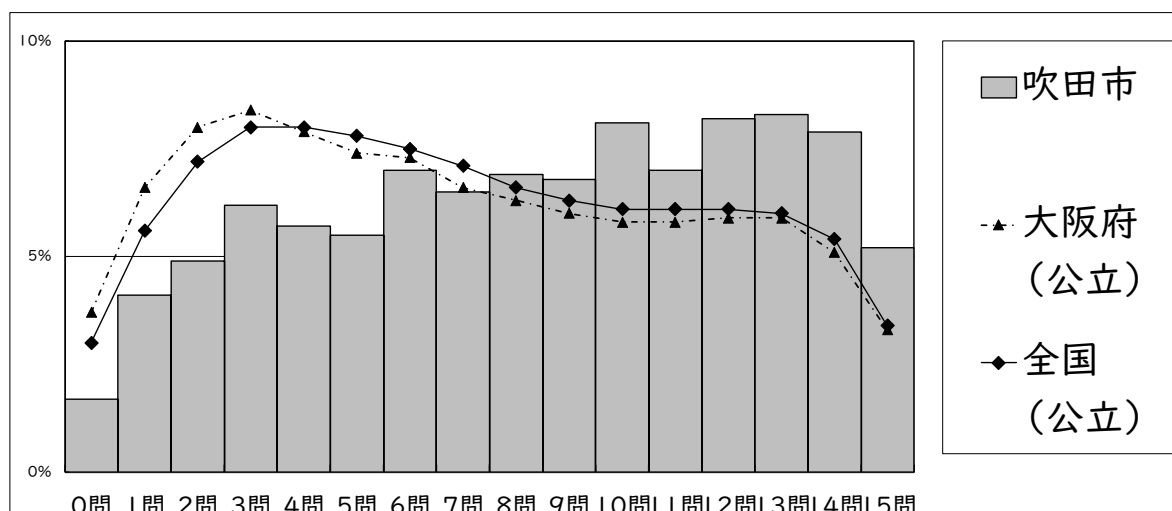
### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、語句や語順を変えることで伝わり方が変わる実例を提示することや、作文後に互いの文章を読み合って改善点を指摘し合う活動を行うこと、同じ内容を異なる形式(友だちへのメールと提出用レポート等)で書き換える活動を取り入れることなど、読み手の存在を実感できる活動を取り入れることが挙げられます。また、作文後に必ず推敲の時間を設け、修正前後の文章を比較し、その改善を評価することも有効です。

そして、この取組を国語だけでなく、他教科の記述活動にも広げることで、生徒の文章表現力の全体的な向上を図ることが重要です。

オ 中学校・数学

(ア) 正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



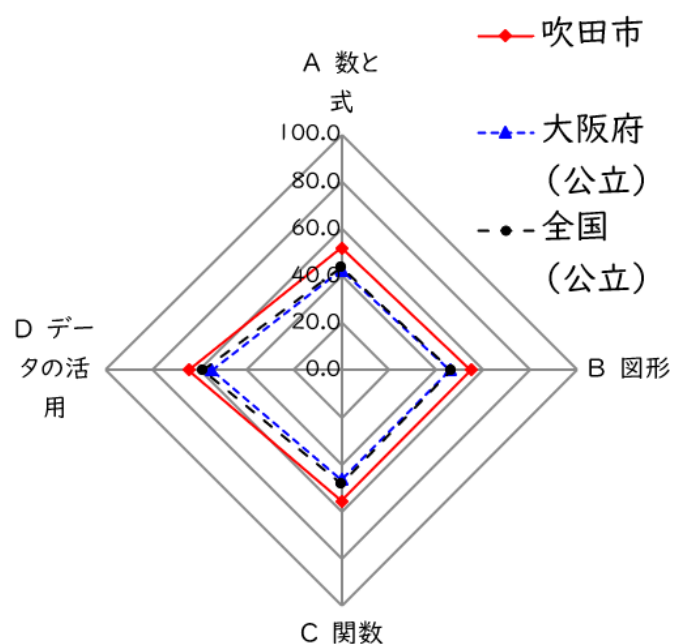
	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
吹田市	2,723	8.4/15	56
大阪府(公立)	58,607	7.0/15	47
全国(公立)	871,097	7.2/15	48.3

(イ) 分類・区別集計結果

※「対象問題数」が「設問なし」の場合、「平均正答率」は空欄

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			吹田市	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		15	56	47	48.3
学習指導要領の 領域	A 数と式	5	52.0	42.4	43.5
	B 図形	4	54.8	46.2	46.5
	C 関数	3	55.4	46.3	48.2
	D データの活用	3	64.6	54.9	58.6
評価の観点	知識・技能	9	61.4	52.9	54.4
	思考・判断・表現	6	47.7	37.4	39.1
	主体的に学習に取り組む態度	設問なし			
問題形式	選択式	3	58.8	52.4	54.0
	短答式	7	60.4	50.5	52.0
	記述式	5	48.0	38.0	39.6

(ウ) 学習指導要領の領域の平均正答率の状況



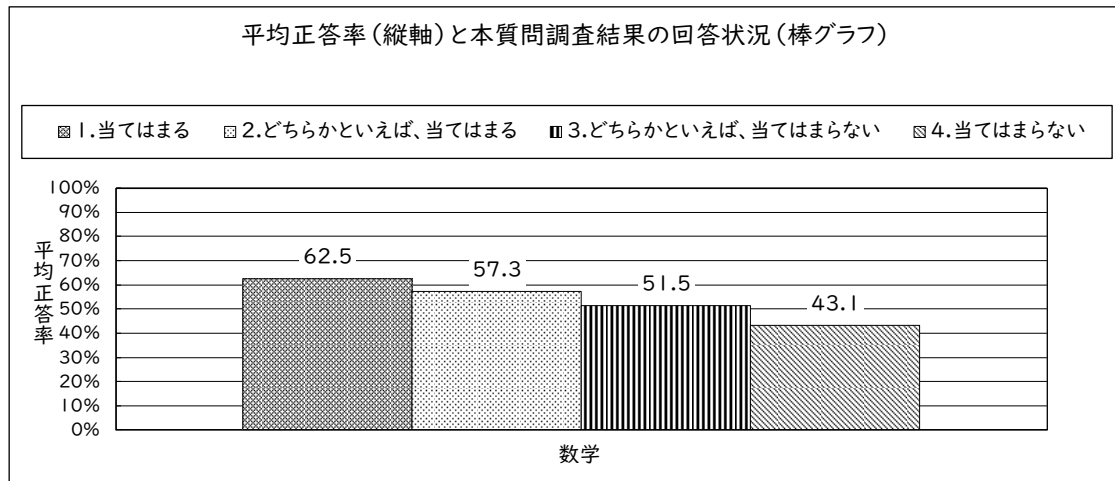
## (エ) 問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)		
			選 択 式	短 答 式	記 述 式	吹 田 市	(大 公 阪 府 立)	(全 国 立)	吹 田 市	(大 公 阪 府 立)	(全 国 立)
1	1から9までの数の中から素数を全て選ぶ	素数の意味を理解しているかどうかをみる	○			36.5	31.2	31.8	0.5	0.8	0.7
2	果汁40%の飲み物amLに含まれる果汁の量を、aを用いた式で表す	数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる		○		64.2	52.0	51.9	5.6	8.3	7.3
3	△ABCにおいて、∠Aの大きさが50°のときの頂点Aにおける外角の大きさを求める	多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる		○		66.6	60.7	58.1	1.5	2.3	2.0
4	一次関数 $y=6x+5$ について、xの増加量が2のときのyの増加量を求める	一次関数 $y=ax+b$ について、変化の割合を基に、xの増加量に対するyの増加量を求めることができるかどうかをみる		○		43.9	33.9	34.7	5.7	8.8	8.0
5	ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める	相対度数の意味を理解しているかどうかをみる		○		50.3	36.5	42.5	8.9	11.0	9.4
6(1)	連続する二つの3の倍数の和が9の倍数になるとは限らないことの説明を完成するために、予想が成り立たない例をあげ、その和を求める	事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができるかどうかをみる		○		67.8	60.0	62.8	4.1	6.4	4.6
6(2)	$3n$ と $3n+3$ の和を $2(3n+1)+1$ と表した式から、連続する二つの3の倍数の和がどんな数であるかを説明する	式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる			○	33.6	24.5	25.7	20.5	28.8	24.9
6(3)	連続する三つの3の倍数の和が、9の倍数になることの説明を完成する	目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる			○	57.6	44.3	45.2	14.4	23.6	20.2
7(1)	Aの手元のカードが3枚とも「グー」、Bの手元のカードが3枚とも「チョキ」でじゃんけんカードゲームの1回目を行うとき、1回目にAが勝つ確率を書く	必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる		○		83.4	75.9	77.4	3.0	4.4	3.2
7(2)	Aの手元のカードが「グー」、「チョキ」、「パー」、「パー」の4枚、Bの手元のカードが「グー」、「チョキ」の2枚のとき、AとBの勝ちやすさについての正しい記述を選び、その理由を確率を用いて説明する	不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる			○	60.2	52.4	55.9	2.3	2.6	2.2
8(1)	A駅からの走行距離と運賃の関係を表すグラフの何を読み取ればC駅とD駅の間の走行距離が分かるかを選ぶ	事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる	○			75.9	69.2	71.9	2.1	2.4	2.3
8(2)	A駅から60.0km地点につくられる新しい駅の運賃がおおよそ何円になるかを求める方法を説明する	事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる			○	46.3	35.9	38.0	29.7	37.9	35.0
9(1)	四角形AECFが平行四辺形であることの証明を振り返り、新たに分かることを選ぶ	証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見だすことができるかどうかをみる	○			64.0	56.9	58.5	0.9	1.2	1.1
9(2)	平行四辺形ABCDの辺CB、ADを延長した直線上にBE=DFとなる点E、Fを取っても、四角形AECFは平行四辺形となることの証明を完成する	統一的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる		○		46.6	34.4	36.3	6.6	8.0	7.2
9(3)	平行四辺形ABCDの辺BC、DAを延長した直線上にBE=DFとなる点E、Fを取り、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分AEの交点をHとしたとき、四角形AGCHが平行四辺形になることを証明する	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる			○	42.0	33.0	33.2	27.4	35.2	31.5

## (オ) 生徒質問調査との関連

### α 質問番号(58)

「数学の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した生徒の数学の平均正答率は62.5%であり、「当てはまらない」と回答した生徒の43.1%と比べて約20ポイント高い結果となっています。このことから、生徒が授業の中で思考したことを言語化する活動を行い、数学的な見方・考え方を働かせることと正答率の高さには一定の相関関係があると考えられます。

【問題6(2)】「表した式から、連続する二つの3の倍数の和がどんな数かを説明する」問題における本市の正答率は33.6%と全ての問題の正答率の中で最も低い結果であり、無解答率も20.5%と高い結果でした。これは、「文字式の意味を正確に読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明する力」に課題があることを示しています。

#### <今後の具体的な方策、支援等>

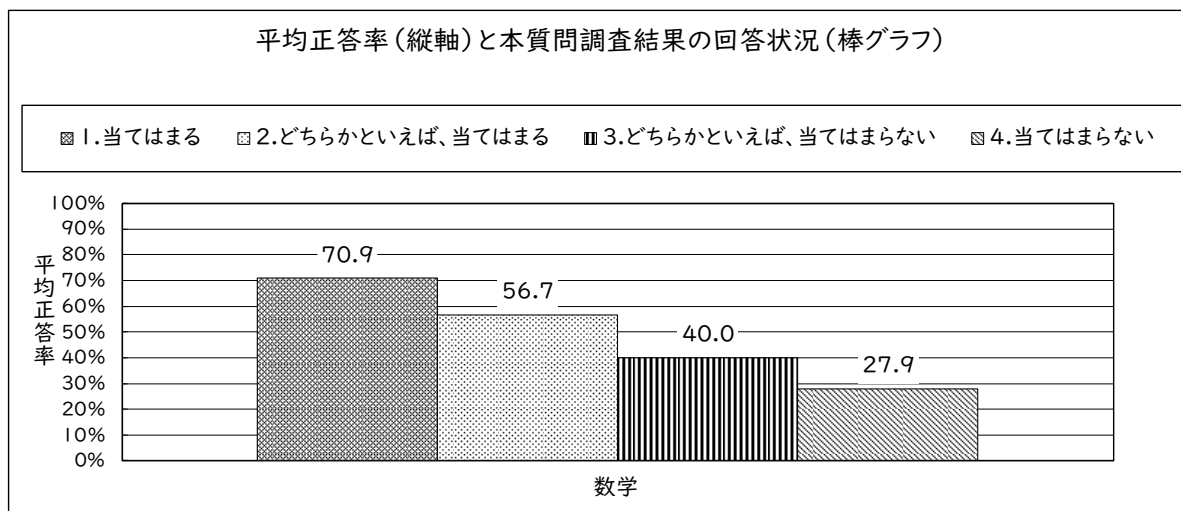
この結果から本市の授業において、「自分の考えを説明する」活動は一定程度行われているものの、他者の説明や文字式を読み取って意味を理解し、関連性を見つけ、それをもとに論理的に記述し、数学的な表現を用いて説明する活動がより必要であることが考えられます。

今後は、日々の授業において、どのように考えたのかを他者と協議する場面を多く設け、「説明を読み取る」、「考えを比べて整理する」、「関連性を見いだす」、「見いだした事実を数学的な表現を用いて説明する」等の学習活動を充実させる必要があります。生徒が「自分の考えを説明する」といった活動だけではなく、他者の考えと比較し、その根拠や違いを整理する活動や説明する力を高めるために「どのような説明がより適切か」や「説明のどこがわかりにくいかなど、説明を批判的に読む力を育てる場面を設ける工夫も必要となります。

また、この取組を数学だけでなく、他教科にも広げることで、生徒の表現力の全体的な向上を図ることが重要です。

## b 質問番号(59)

「文字式を用いた説明や図形の証明を読んで、かかれていることを理解することができる」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した生徒の数学の平均正答率は70.9%であり、「当てはまらない」と回答した生徒の27.9%と比べて約40ポイント高い結果となっています。このことから、この質問の肯定的回答率が高い場合は正答率が高く、肯定的回答率が低い場合は正答率が低くなっており、理解度の認識が実際の正答率につながっていることを示しています。

【問題9(1)】は、既に提示された平行四辺形の証明を振り返り、その内容をもとに新たな関係性を見いだすという「数学的な見方・考え方の活用」が問われている問題であり、説明にある表現を正しく理解する力が必要となります。この問題では「図形の証明に関する記述を正確に読み取る力」が問われており、質問番号(59)との関連が高いと考えられます。質問番号(59)で「あてはまる」と答えた生徒は、図や文字式を使った説明を正確に読み解く力があるため、9(1)の正答率が高い傾向にあり、「あてはまらない」とした生徒は、このような説明文から必要な情報を読み取る力や新たな関係性を見いだす力に課題があることと考えられます。

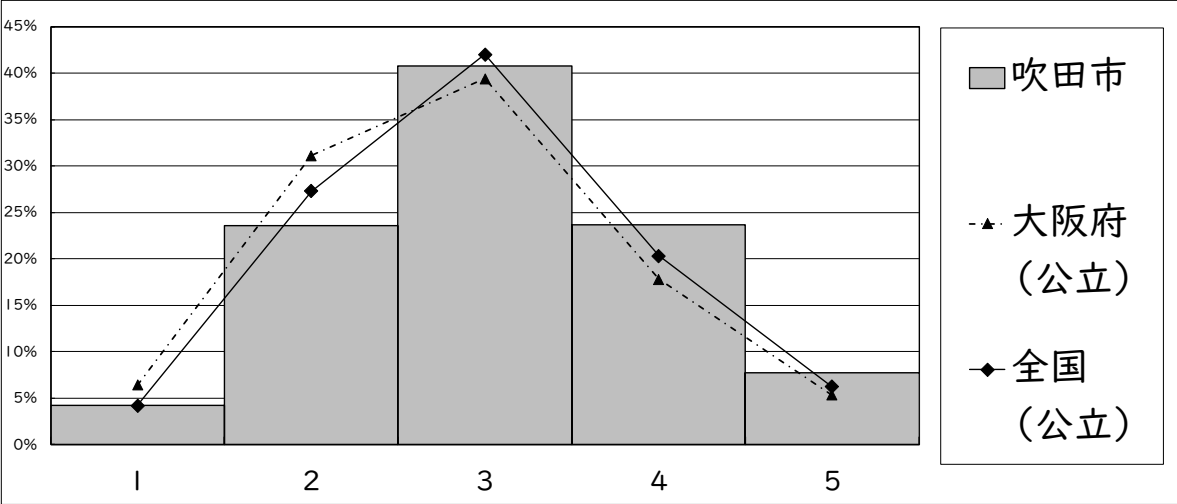
### <今後の具体的な方策、支援等>

今後は、日々の授業において、図や式を使って説明された内容を、自分なりに整理したり、生徒どうしで説明し合う時間を設け、「伝える力」と「読み取る力」を相互に高める工夫が必要です。また、記述された情報から図形を構成・理解する力の育成に向けて、「この図形を文章で説明するとどうなるか」や「友だちの説明をきいて図形を表現できるか」などといった活動をグループで行い、「伝える力」と「読み取る力」に着目した振り返りの時間を設けることも有効です。

また、この取組を数学だけでなく、他教科にも広げ、教科横断的に記述の読解や表現力の育成をしていくことが重要です。

カ 中学校・理科

(ア) IRTバンド分布グラフ(横軸:IRTバンド、縦軸:割合)



	生徒数	平均IRTスコア
吹田市	1,840	517
大阪府(公立)	57,913	487
全国(公立)	864,634	503

(イ) 問題別集計結果

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)			問題の難易度
			選択式	短答式	記述式	吹田市	(大阪府立)	(全国立)	吹田市	(大阪府立)	(全国立)	
1(1)	電熱線を利用して水を温めるための電気回路について、直列と並列とで回路全体の抵抗が大きい装置や速く水が温まる装置を選択する	電熱線で水を温める学習場面において、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	○			55.2	52.7	51.9	0.4	0.4	0.2	5
1(2)	「理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのかな?」という疑問を解決するための課題を記述する	身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる			○	43.8	40.2	46.2	9.1	11.6	8.0	5
1(3)	地層1から地層4までの性質から、水が染み出る場所を判断し、その場所を選択する	露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈できるかどうかをみる	○			35.5	33.5	36.2	0.9	1.1	0.6	5
1(4)	生物1から生物4までの動画を見て、呼吸を行う生物をすべて選択する	水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる	○			28.0	27.7	29.7	0.3	0.4	0.2	5
1(5)	塩素の元素記号を記述する	塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる		○		48.1	45.6	44.9	7.8	9.9	8.5	4
1(6)	水道水と精製水に関する2人の発表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する	科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる			○	78.9	73.8	79.4	9.7	13.4	9.9	3
2(1)	【考察】をより確かなものにするために必要な実験を選択し、予想される実験の結果を記述する	【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できるかどうかをみる			○	17.2	12.4	14.0	3.3	3.0	1.9	5
2(2)	「Webページの情報だけを信用して考察してよいか」について判断し、その理由として適切なものをすべて選択する	ストローの太さと音の高低に関する情報を収集してまとめを行う学習活動の場面で、収集する資料や情報の信頼性についての知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	○			97.2	92.0	94.6	0.0	0.4	0.1	2

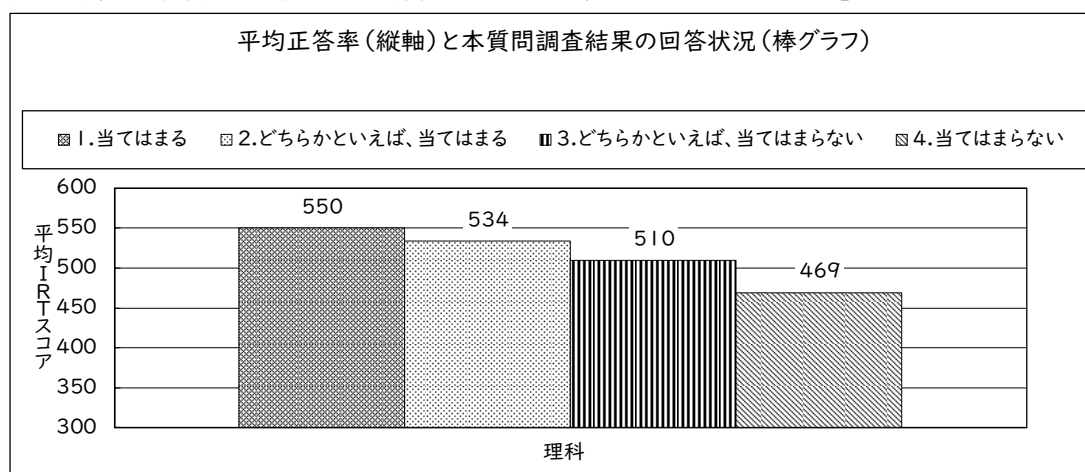
次ページに続く

問題番号	問題の概要	出題の趣旨	問題形式			正答率(%)			無解答率(%)			問題の難易度
			選択式	短答式	記述式	吹田市	(大阪府)	(全国)	吹田市	(大阪府)	(全国)	
3(1)	設定した【仮説】が正しい場合の実験結果の予想を選択する	仮説を立てて科学的に探究する学習場面において、電気回路に関する知識及び技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想することができるかどうかをみる	○			34.4	34.6	34.9	0.2	0.2	0.2	5
3(2)	抵抗に関する知識を手掛かりに、身近な電気回路に抵抗がついている理由を選択する	身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる	○			84.8	83.1	85.2	0.3	0.2	0.1	2
4(1)	プロパンガスと都市ガスでシャボン玉を作ったときの様子から、プロパンガス、都市ガス、空気の密度の大小を判断し、小さい順に並べる	ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できるかどうかをみる	○			41.2	45.2	50.4	1.5	0.3	0.1	4
4(2)	「一酸化炭素は空気より軽い」という性質を基に、適切な避難行動を選択する	火災における適切な避難行動を問うことで、気体の性質に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる	○			88.2	92.2	92.8	0.0	0.2	0.1	2
5(1)	加熱を伴う実験において、火傷をしたときの適切な応急処置を選択する	加熱を伴う実験における実験器具の操作等に関する技能が身に付いているかどうかを見る	○			93.2	90.9	93.0	0.2	0.2	0.1	1
5(2)	実験の動画と実験結果の図から、どのような化学変化が起きているか判断し、原子や分子のモデルを移動させることで、その化学変化をモデルで表す	化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる			○	43.4	33.0	35.6	4.1	5.3	4.6	4
6(1)	牧野富太郎の「ノジグク」のスケッチから分かるスケッチの技能について、適切なものを選択する	スケッチから分かることを問うことで、スケッチに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる	○			67.7	63.5	65.9	0.3	0.3	0.2	4
6(2)	牧野富太郎の「サクユリ」のスケッチから、サクユリの【茎の横断面】、【根】として適切なものを判断し、選択する	スケッチから分かる植物の特徴を基に、植物の葉、茎、根のつくりに関する知識及び技能を活用して、植物の茎の横断面や根の構造について適切に表現できるかどうかをみる	○			41.9	38.8	41.9	0.2	0.2	0.1	4
7(1)	小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造と同じ構造をもつものとして適切な事象を判断し、選択する	小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造について学習する場面において、共通性と多様性を見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することができるかどうかをみる	○			35.3	32.1	34.8	0.0	0.4	0.2	5
7(2)	消化によってデンプンがブドウ糖に分解されることと、同じ化学変化であるものを選択する	分解に関する身近な事象を問うことで、これまでに学習した理科の知識及び技能を基に、化学変化の分解の知識が概念として身に付いているかどうかをみる	○			47.1	49.7	51.6	0.0	0.4	0.2	5
8(1)	大地の変化に関する言い伝えを1つ選択し、その選択した言い伝えが科学的に正しいと判断するための理由を「地層を調べたときに何が分かればよいか」に着目して記述する	地域の言い伝えを科学的に探究する学習場面において、大地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうかをみる			○	49.3	36.8	42.2	2.2	4.5	3.2	4
8(2)	Aさんの考えを肯定するためにはボーリング地点③の結果がどのようになればよいかを判断し、青色の地層を移動させ、ボーリング地点③の結果をモデルで示す	大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がりを検討して表現できるかどうかをみる			○	20.0	18.4	18.1	1.7	1.8	1.1	5
9(1)	【予想】から学習した内容が反映されたAさんの【振り返り】を読み、Aさんの【予想】を判断し、選択する	気圧について科学的に探究する場面において、状態変化や圧力に関する知識及び技能を基に、予想が反映された振り返りについて問うことで、探究の過程の見通しについて分析して解釈できるかどうかをみる	○			32.1	27.9	31.8	0.0	0.8	0.3	5
9(2)	クリーンルームのほかに気圧を利用している身近な事象を選択する	気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いているかどうかをみる	○			63.7	53.1	58.1	0.0	0.7	0.3	4

## (ウ) 生徒質問調査との関連

### α 質問番号(66)

「理科の授業で学習した考え方を普段の生活の中で活用できている」



#### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した生徒の平均IRTスコアは550であり、「当てはまらない」と回答した生徒の469と比べると、81高くなっており、顕著な差がみられます。このことから、理科の授業における学びを日常生活に結びつけ活用できるかどうか、理科の知識の定着や学習意欲に繋がっている重要な要素であると言えます。

【問題1(2)】「理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのかな?」という疑問を解決するための課題を記述する」における本市の正答率は43.8%であり、全国平均の正答率より2.4ポイント低く、無解答率は9.1%と全国平均の無解答率8.0%より1.1ポイント高い結果でした。これは、「身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定すること」に不慣れであり、日常生活の中で「なぜそうなるのか」を考える経験が不足している生徒が多いことを示しています。

この課題の背景として、授業内で学習した内容が実生活にどのように関係しているかを十分に確認していないことや実験・観察を通じて自分で確かめる経験が不足していることが考えられます。

#### <今後の具体的な方策、支援等>

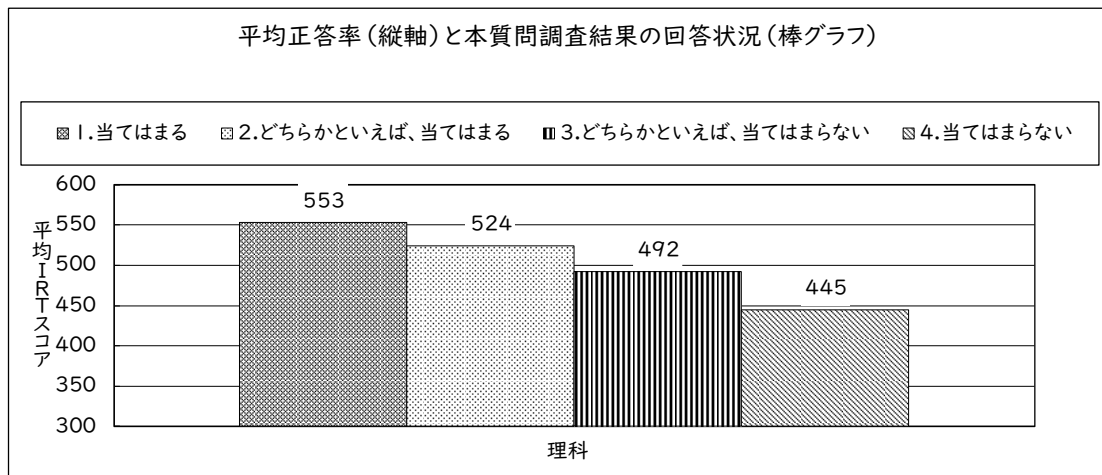
今後は、授業の中で天気や植物、電気など身近な題材を取り入れて、学びを生活と結びつけることや、家庭や地域で観察・調査をする課題を設定する等の工夫をすることが挙げられます。また、「今日の学びを生活にどう活かすことができるか」をシートに記入する等振り返る習慣をつけることも効果的です。課題を自ら設定し、結論に至るまでの過程を経験する探究活動を授業内で行ったり、ICTを活用して観察データをまとめ、考察を深めたりすることも大切です。

これらを通じて、生徒に理科の有用性を自ら実感させ、理科の授業で学習した知識や考え方を生活の中で応用できる力を育てていく中で、学習意欲や学力の向上、探究心の育成を図ることが重要です。



## b 質問番号(70)

「理科の授業で、課題について観察や実験をして調べていく中で、自分や友達の学びが深まったか、あるいは、新たに調べたいことが見つかったか、振り返っている」



### <本市の結果を踏まえた分析>

「当てはまる」と回答した生徒の平均IRTスコアは553であり、「当てはまらない」と回答した生徒の445と比べ108高くなっています。これは、理科の授業における「振り返り」の有無が学習内容の理解や定着、応用力の形成に大きく影響していることを明確に示しています。

質問番号(70)と関連性のある、【問題1(6)】「水道水と精製水に関する2人の発表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する」における本市の正答率は78.9%、無解答率は9.7%であり、全国平均(正答率79.4%、無解答率9.9%)とほぼ同様の結果でしたが、この問題における無解答率は、本市の理科の問題中一番高い数値でした。先述のとおり、【問題1(2)】の無解答率も9.1%であることから、「何をどう振り返ればよいか」を具体的に理解していない生徒や、普段から「自分で問いを立てる」経験が少なく、振り返りの動機が生まれにくい生徒が一定数いることがわかります。この課題の背景として、授業時間内での振り返り活動(観察・実験後のまとめや共有)に十分に時間が確保されていないことが考えられます。

### <今後の具体的な方策、支援等>

まずは授業構成の中に振り返り時間を明確に組み込み、観察・実験後の5～10分程度を「まとめ・共有」の時間として確保することが必要です。次に「今日わかったこと」「友達の意見で新しく知ったこと」「次に調べたいこと」等、振り返りの視点を明示し、簡潔に記述させることが大切です。そして、ICTを活用しながら振り返りを共有し、相互に質問や意見を出し合うことで、他者の発見に触れ、自分にはなかった視点を得ることができるよう工夫することが大切です。また、端末に振り返りを記録することで、後に生徒自身の変容を確認することもできます。

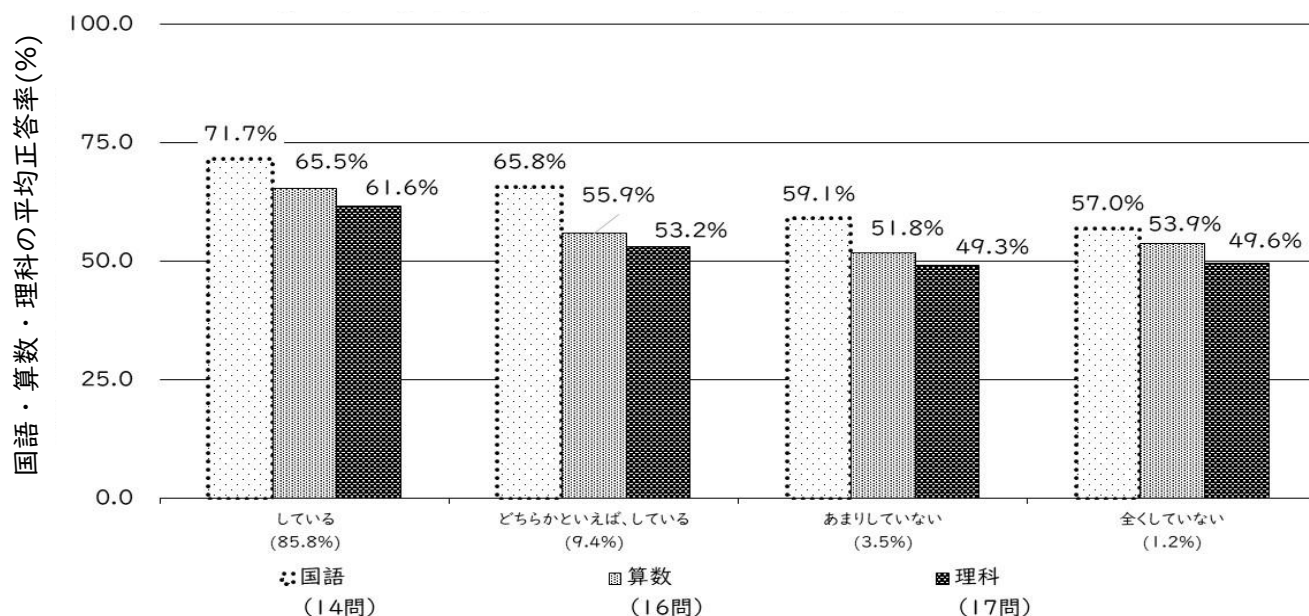
さらには、授業冒頭で前回の振り返りカードを読み上げる等、生徒の疑問や課題を授業計画に一部反映し、「自分たちの問いが授業をつくる」という経験を与えることで、観察・実験を「やって終わり」ではなく、学びを広げる起点になるということを実感させることが重要です。

### 3 児童・生徒の質問調査結果

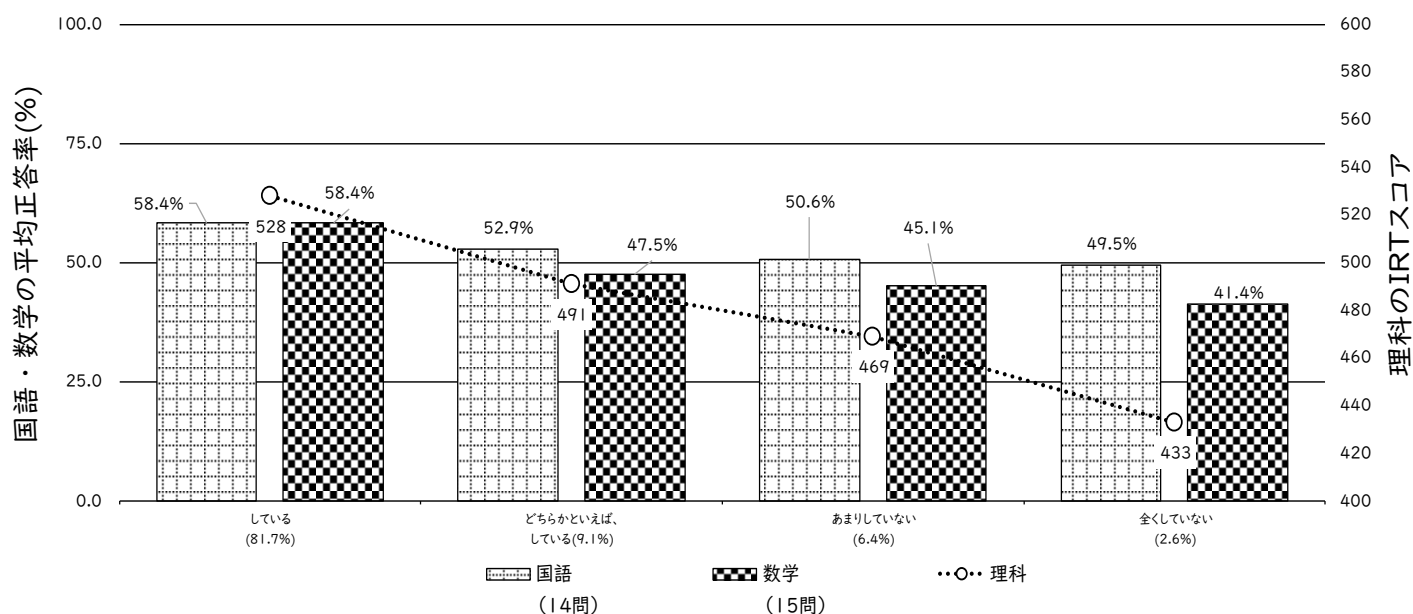
#### (1) 生活や将来等に関する質問に対する回答と平均正答率の関係(数字は割合)

##### ア 質問「朝食を毎日食べている」

【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



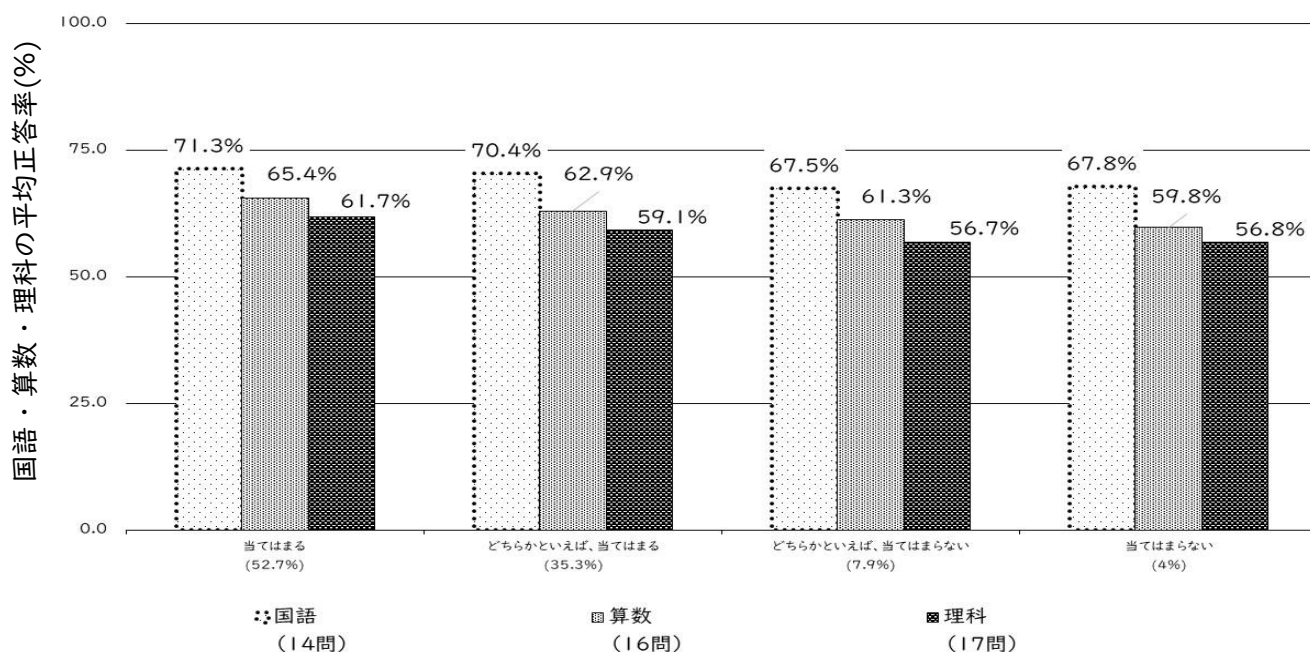
【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



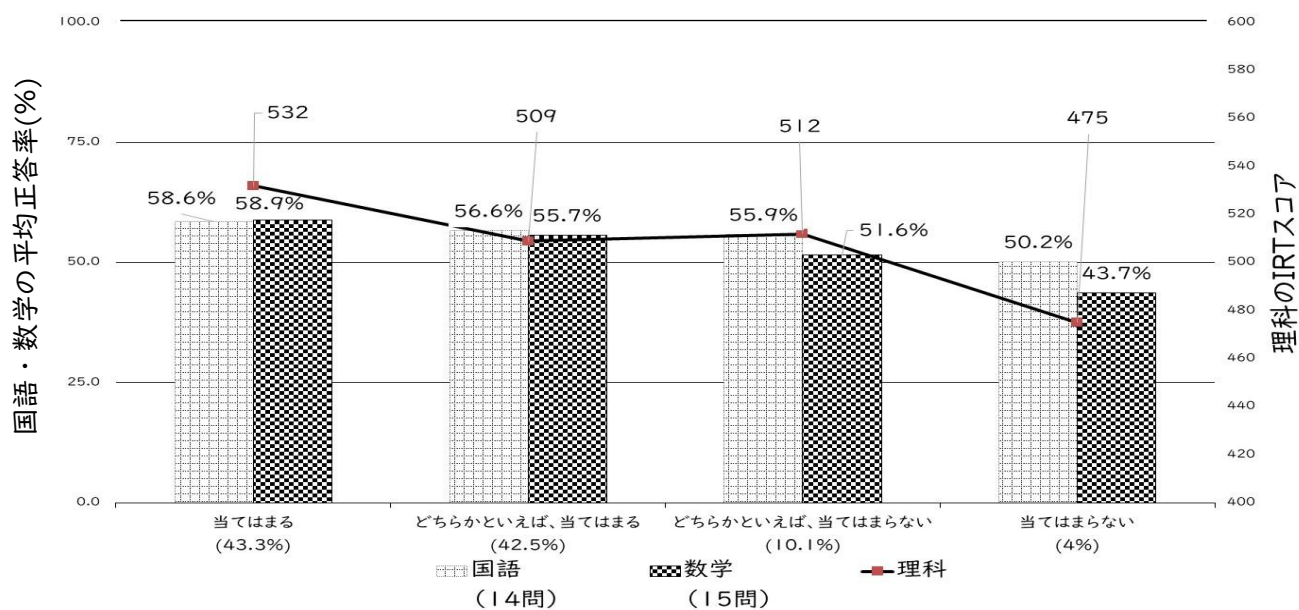
本質問に対する「している」「どちらかといえば、している」という肯定的な回答率は、小学校95.2%、中学校90.8%でした。「全くしていない」と回答した児童・生徒の各教科の平均正答率は、本質問に対して肯定的な回答をした児童・生徒の各教科の平均正答率に比べ、2～17ポイント低い結果となりました。朝食を毎日食べる(または、どちらかといえば、毎日食べる)ということは、規則正しく生活する習慣が身に付いている一因とも考えられ、学習面においても影響を受けている可能性があります。

イ 質問「自分には、よいところがあると思う」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



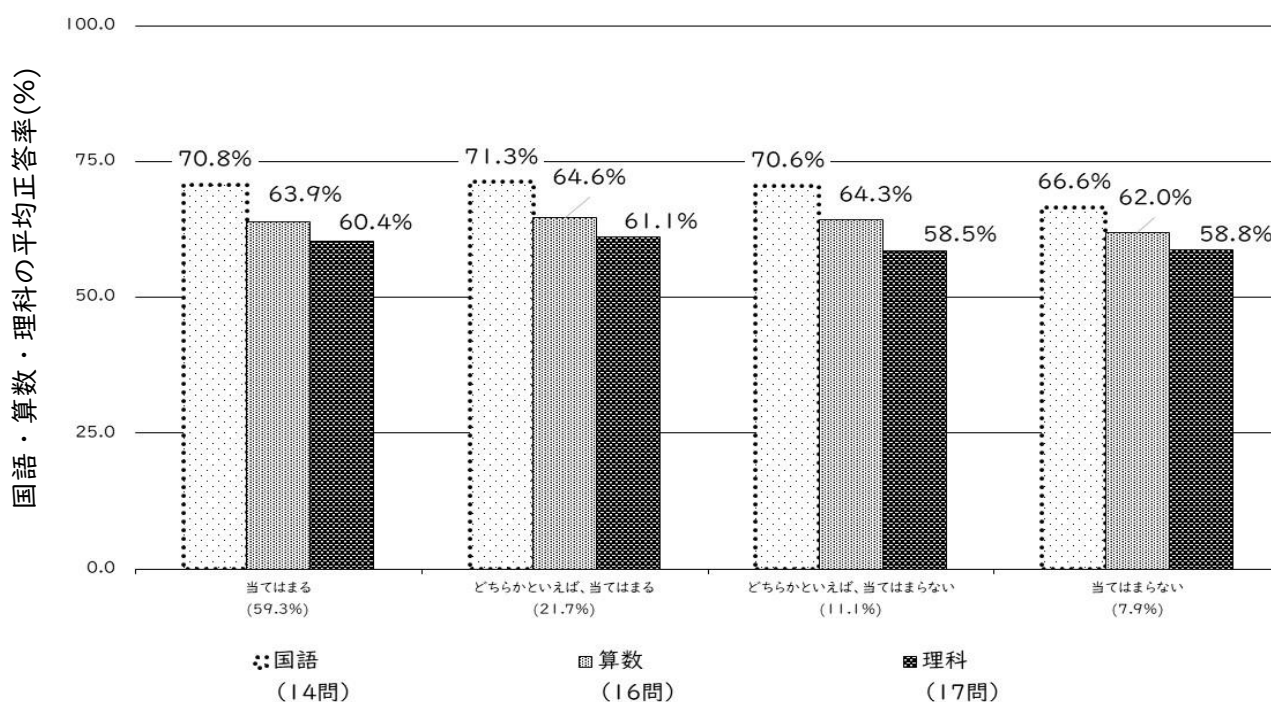
### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



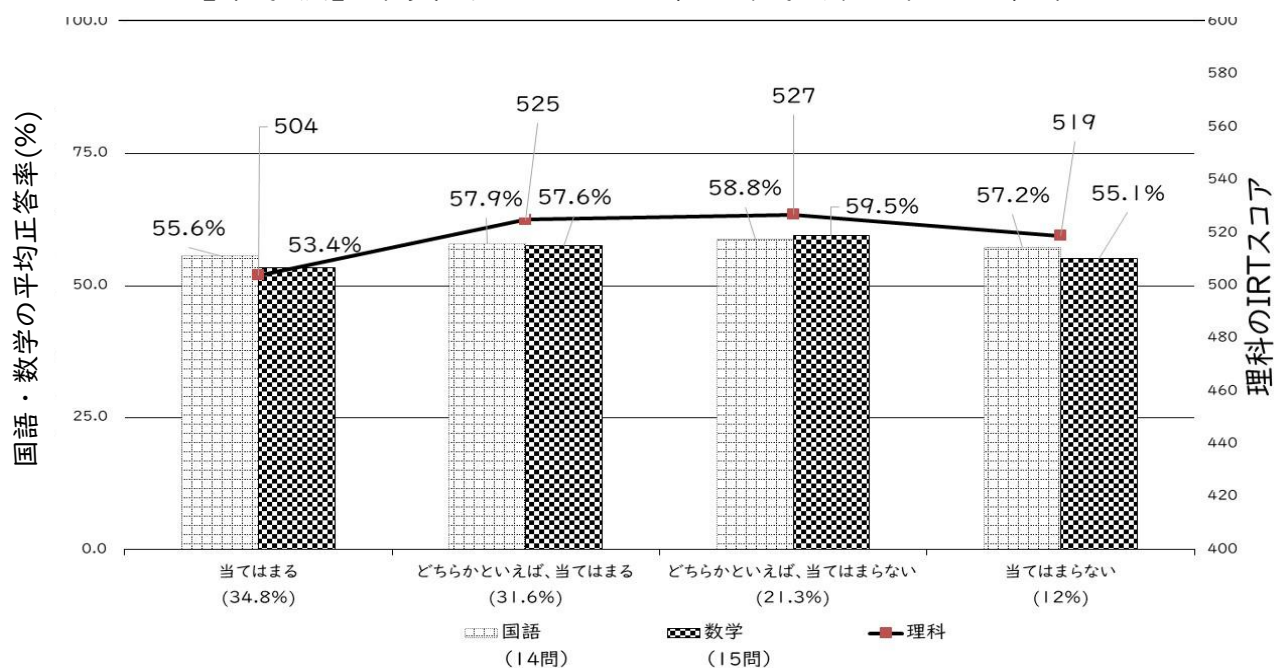
本質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答率は、小学校88%、中学校85.8%でした。一方で、「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」という否定的な回答率は、小学校11.9%、中学校14.1%であり、中学校がやや高い傾向があります。中学校では、本質問に対する肯定的な回答をした生徒と比べると、否定的な回答をした生徒は、各教科の平均正答率が国語で最大8.4ポイント、数学で最大15.2ポイント、理科は最大IRTスコアで57低い結果となり、自己肯定感や自信を持つことが学習面に影響を与えている可能性があります。小学校では、肯定的な回答と否定的な回答の差が、約5ポイントにとどまることから、中学校ではより大きく影響していると考えられます。

## ウ 質問「将来の夢や目標をもっている」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

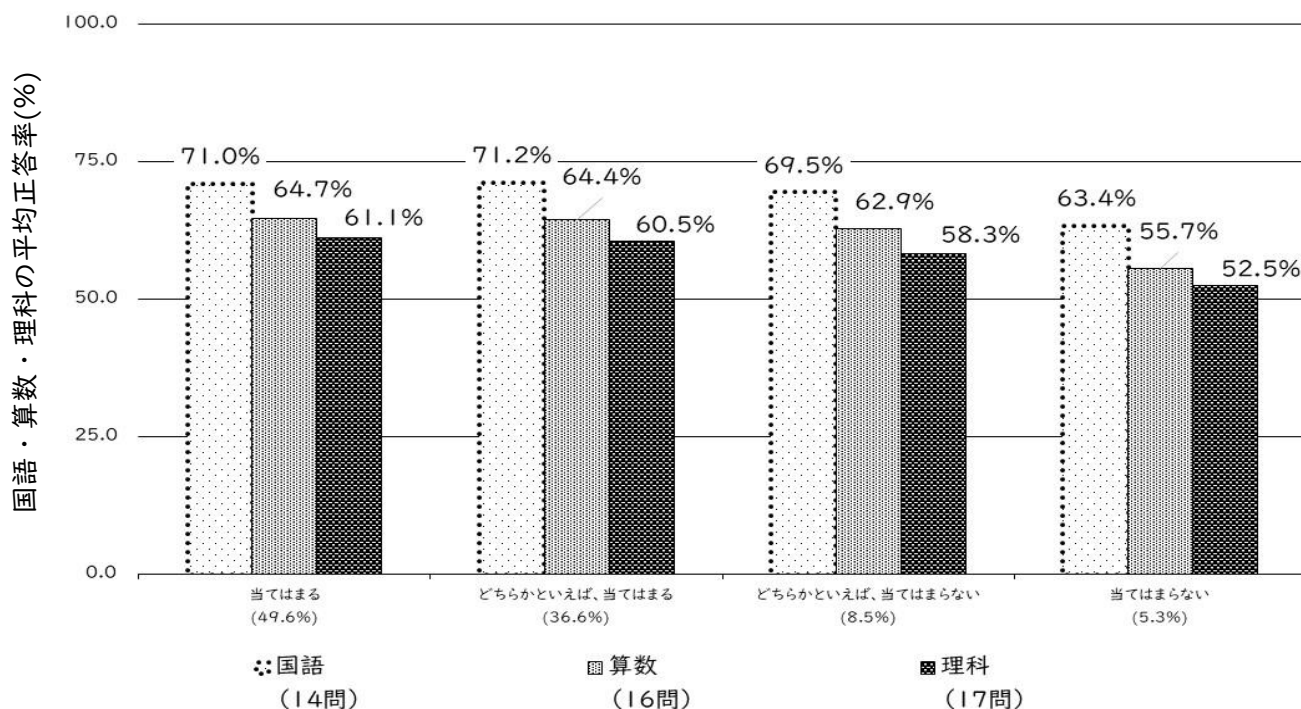


本質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答率は、小学校81%、中学校66.4%と14.6ポイントの違いが見られます。中学校では本質問に対する肯定的回答率が70%に満たないことから、今後さらなる小中連携を深め、中学校におけるキャリア教育をより充実させる必要があると考えます。特に進路等将来について悩む多感な時期であることから、学校と家庭の連携に留意し、将来の夢や目標が持てる指導の充実が必要です。

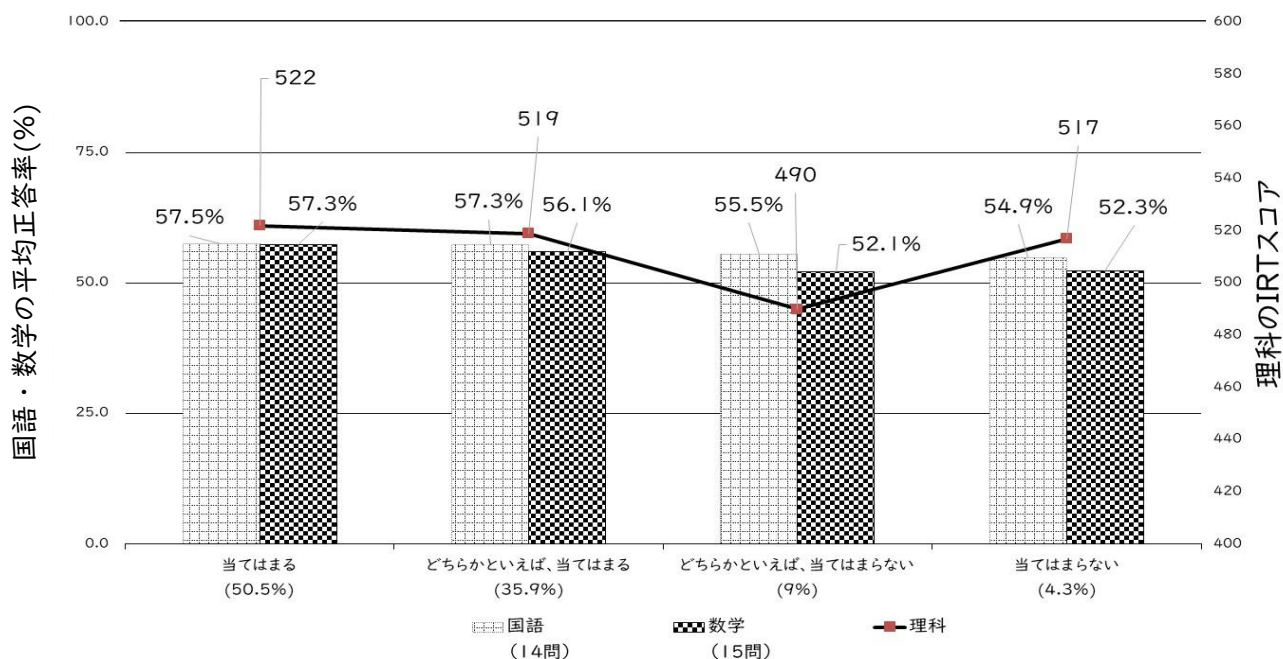


## エ 質問「学校に行くのは楽しいと思う」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



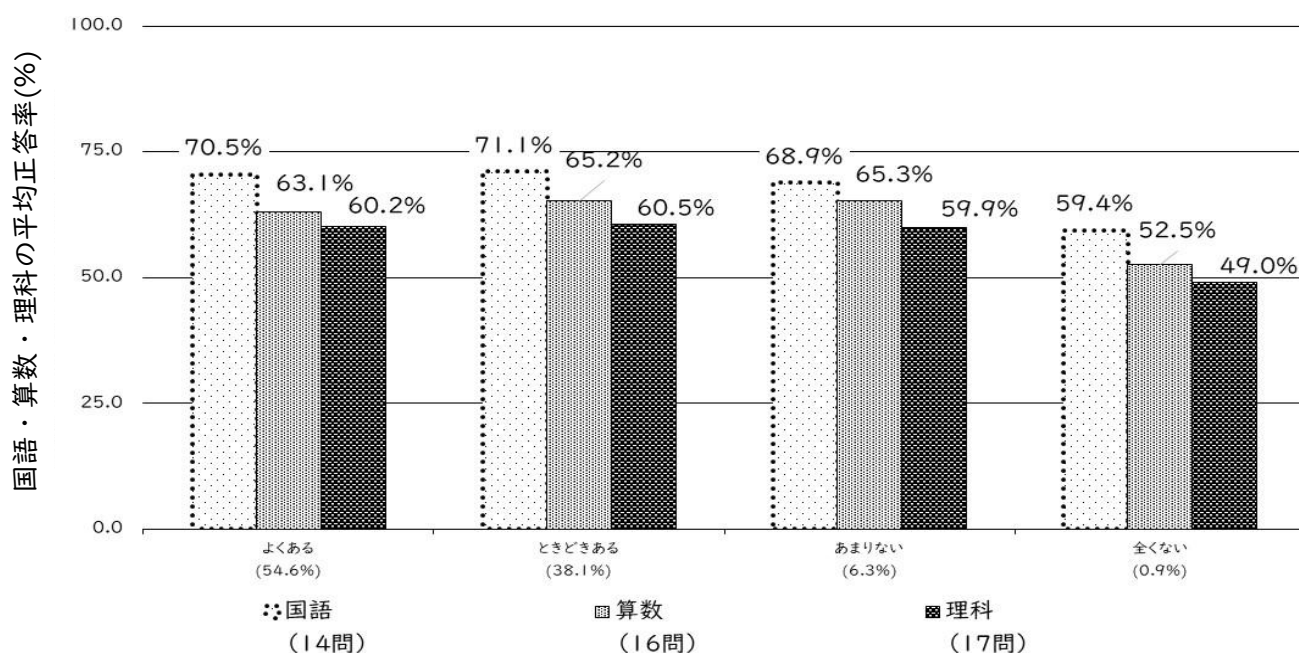
### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



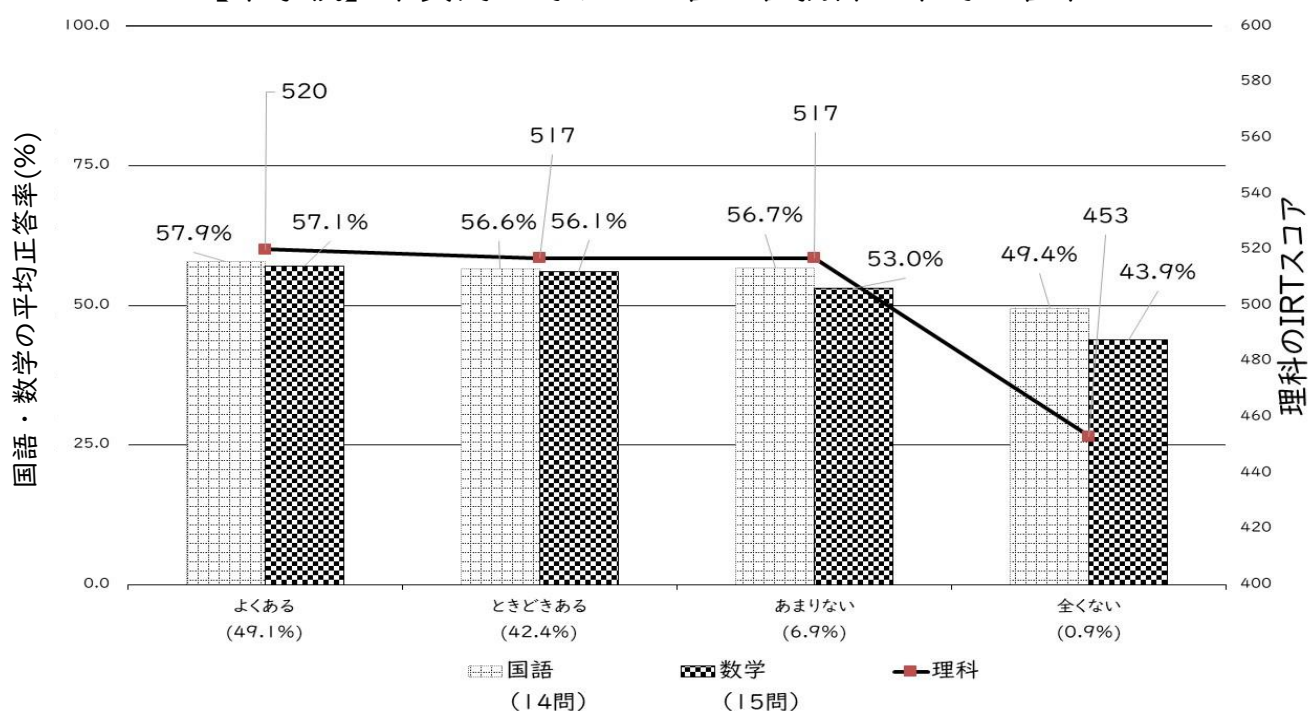
本質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答率は、小学校86.2%、中学校86.4%でした。各教科の平均正答率との関係からは、小学校で肯定的な回答をした児童とそうでない児童で最大8ポイントの差が見られます。学校で過ごす時間の多くが授業時間であることから、学ぶことを楽しめるよう授業改善を進めることが重要と考えています。児童・生徒が、「好き」「楽しい」「おもしろい」と前向きな気持ちで学習に向かえるような工夫が必要です。

オ 質問「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか。」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

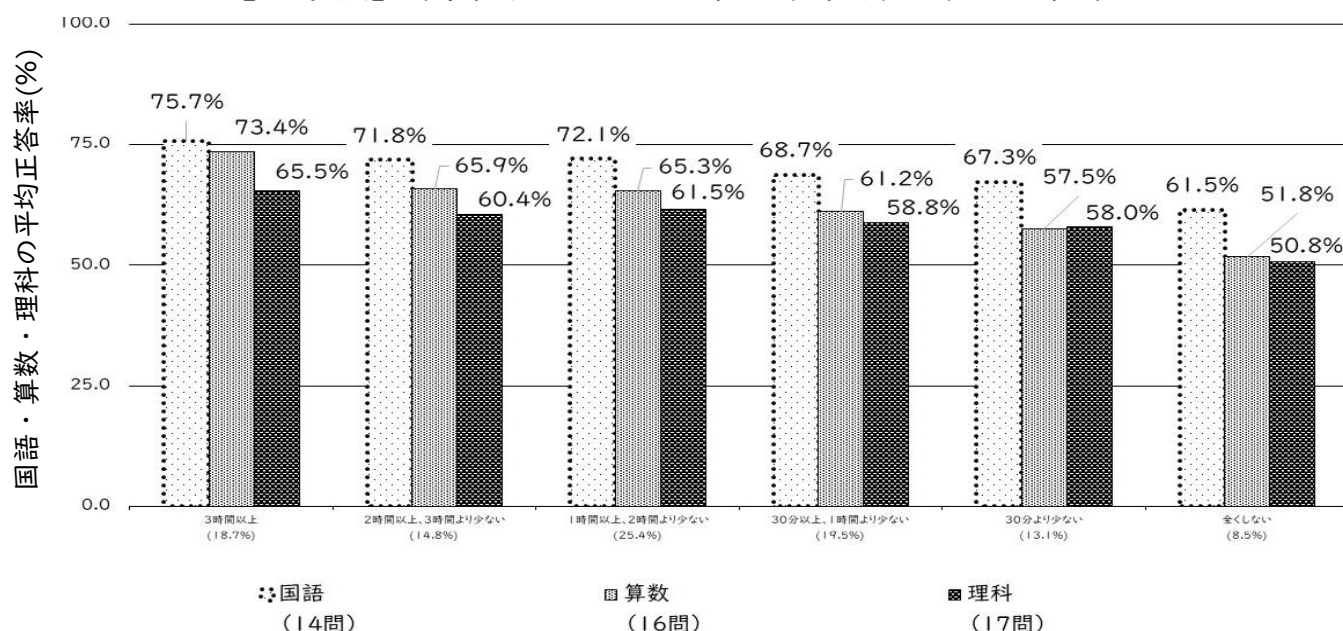


本質問に対する「よくある」「ときどきある」という肯定的な回答率は、小学校92.7%、中学校91.5%でした。小中学校どちらにおいても90%を超えているものの、「あまりない」「全くない」と回答している児童・生徒が一定数いることに着目する必要があると考えます。特に、「全くない」と回答した児童・生徒は、各教科の平均正答率が肯定的な回答をした児童・生徒に比べ、小学校で最大11.2ポイント、中学校で最大13.2ポイント低いため、基礎的な学習の支援も継続して行う必要があります。

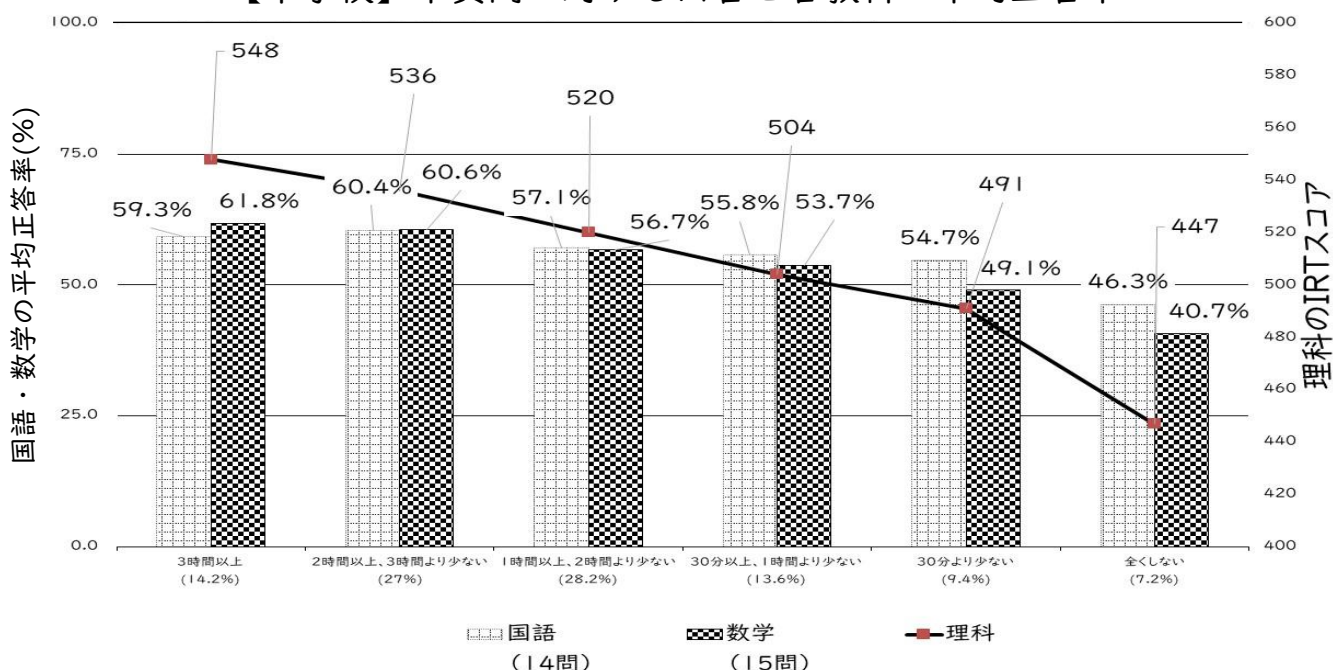


カ 質問「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含まれます）。」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



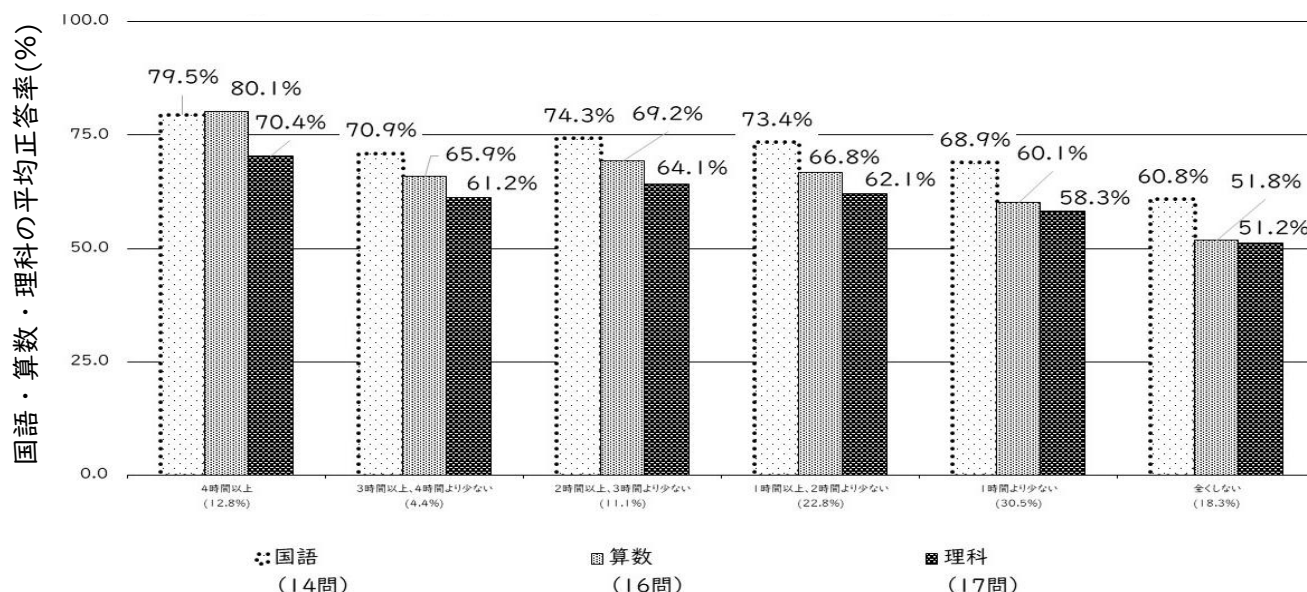
### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



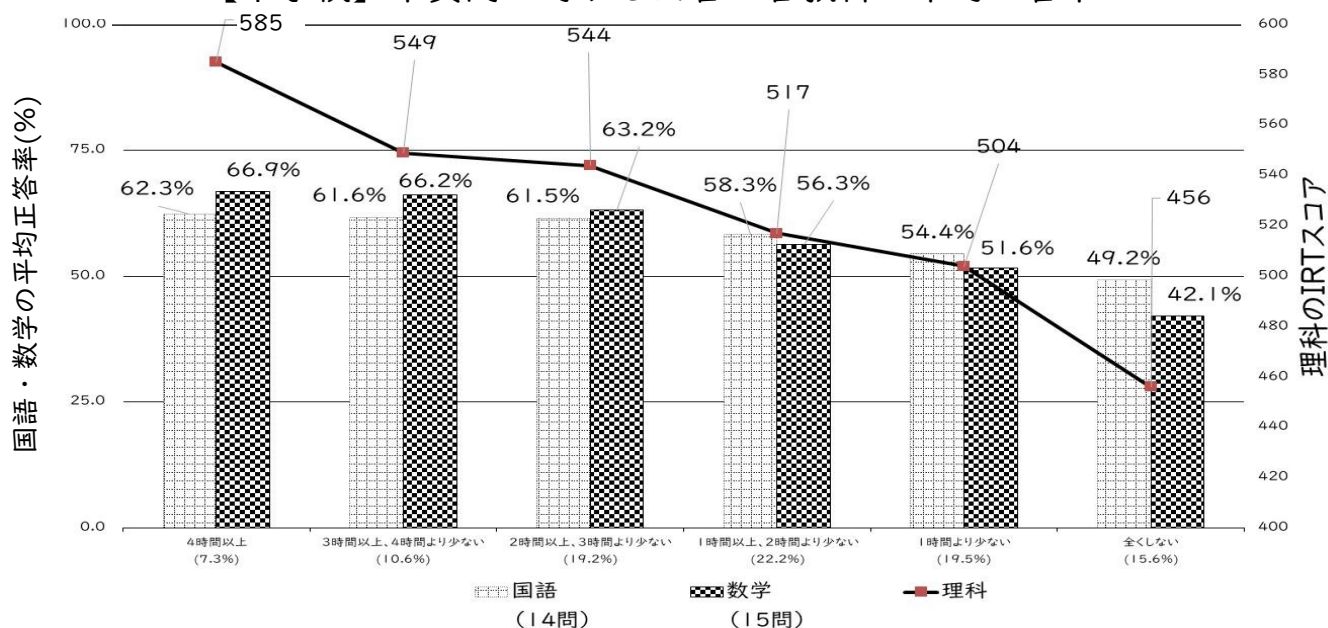
本質問に対して「3時間以上」「2時間以上、3時間より少ない」「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童・生徒は、小学校58.9%、中学校69.4%でした。一方で、「30分より少ない」「全くしない」と回答した児童・生徒は、小学校21.6%、中学校16.6%であり、各教科の平均正答率の差も、小学校で約10ポイント、中学校で約20ポイント見られます。月曜日から金曜日の学校外での学習方法や時間の使い方等について、学校・家庭で連携して、児童・生徒を支援していく必要があります。

キ 質問「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含みます）。」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

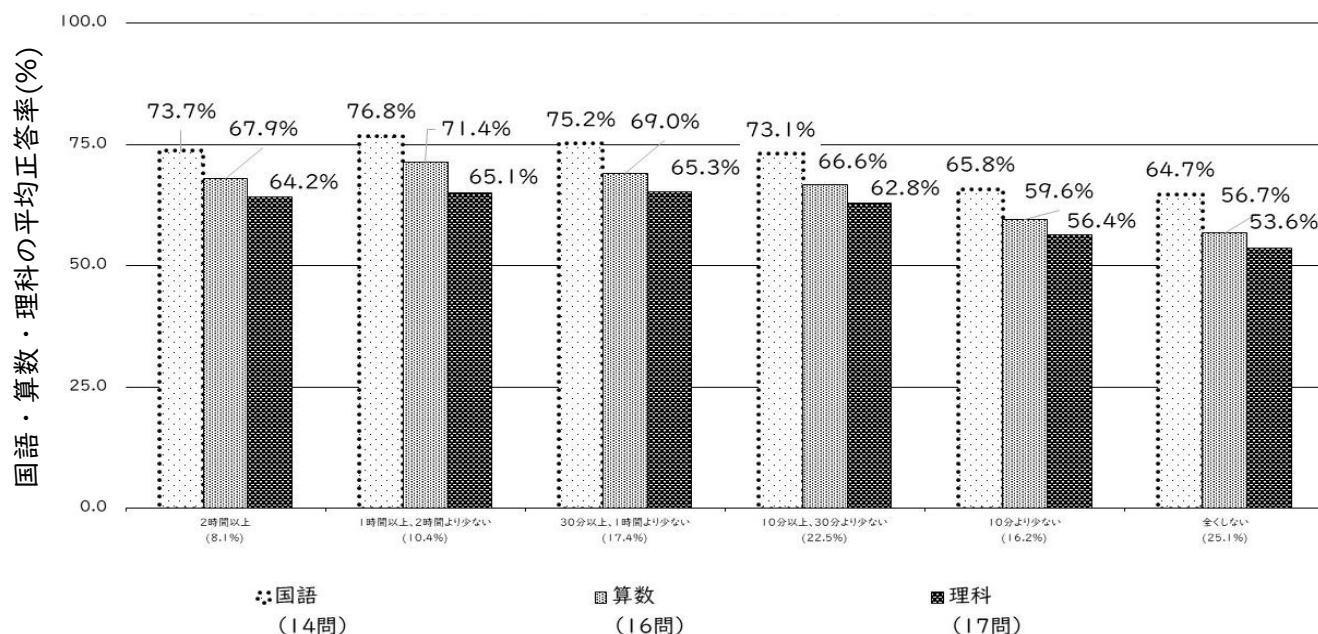


本質問に対して「4時間以上」「3時間以上、4時間より少ない」「2時間以上、3時間より少ない」「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童・生徒は、小学校51.1%、中学校59.3%でした。一方で、「1時間より少ない」「全くしない」と回答した児童・生徒は、小学校48.8%、中学校35.1%でした。「全くしない」と回答した児童・生徒の各教科の平均正答率は、1時間以上している児童・生徒より約10ポイント低いことから、学習の質を高め、学校・家庭で連携し自立した学習者を育成し、学習の定着を図ることができるといえるような支援を行う必要があります。

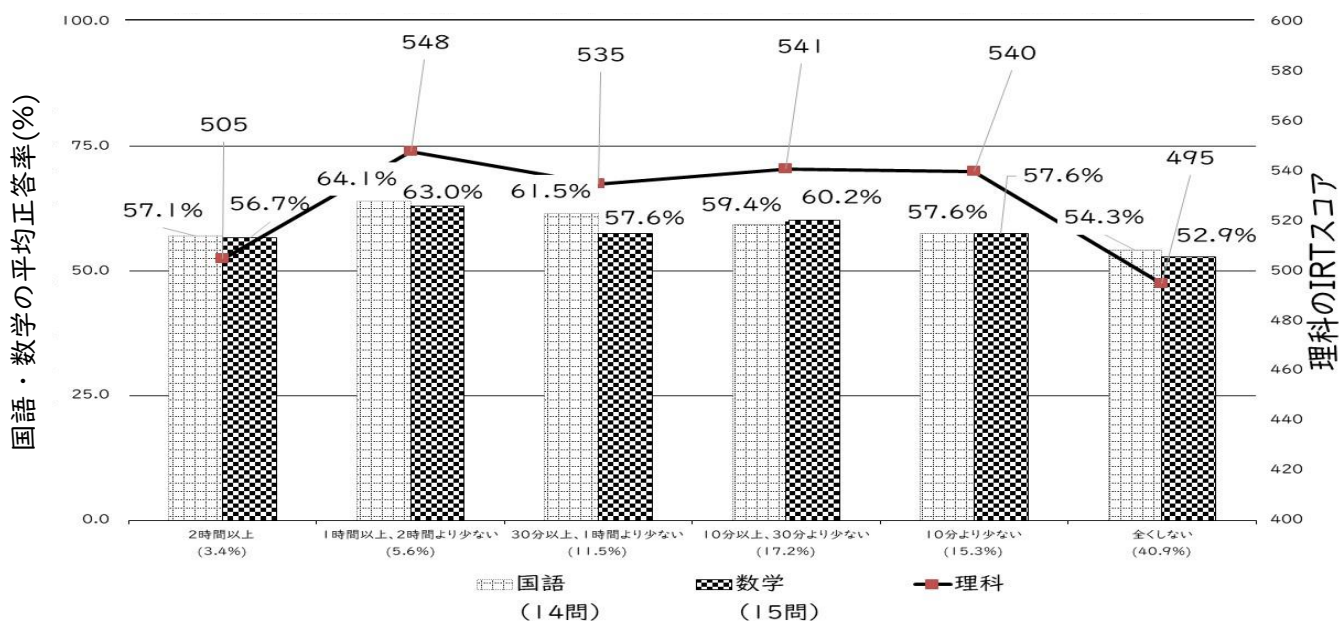


ク 質問「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（電子書籍の読書も含みます。教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます）。」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

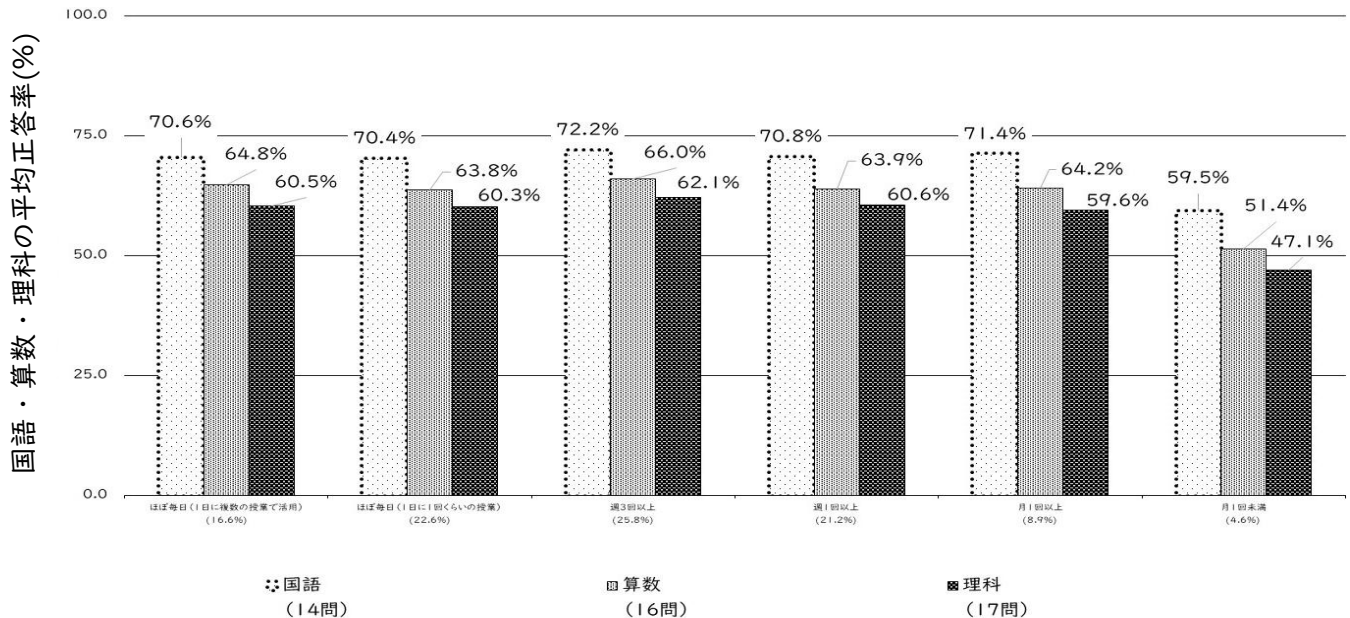


本質問に対して「10分以上」と回答した児童・生徒は、小学校58.4%、中学校37.7%でした。小学校においては、「10分以上、30分より少ない」と回答した児童の平均正答率と「全くしない」と回答した児童の平均正答率を比べると、各教科において約10ポイント近い差があることから、10分以上30分より少ない時間でも読書をするのが児童の学習に良い影響を与えている可能性があることがわかります。中学校においては、「10分より少ない」「全くしない」という回答率が56.2%であり、読書をしない児童・生徒が増えている可能性があると考えます。児童・生徒が読書を通して世界を広げ、生涯において学び続ける姿勢を養うため、学校・家庭で連携し、読書を促す支援が必要です。

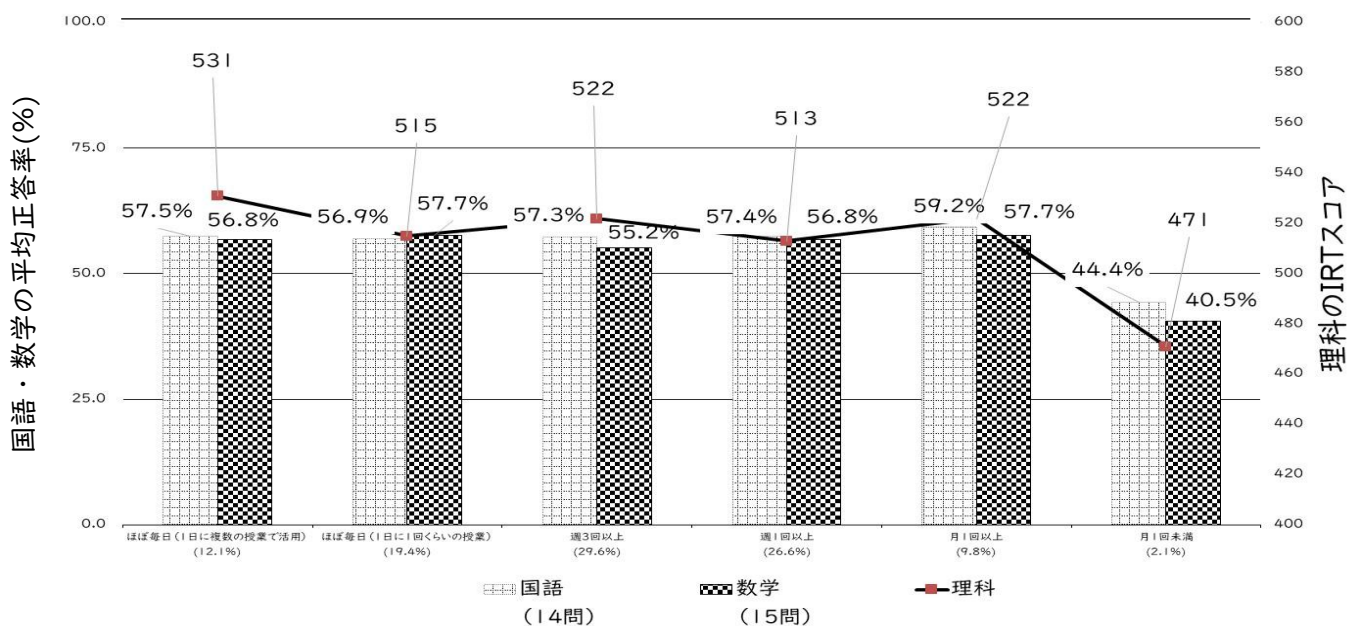
(2) ICTを活用した学習状況、主体的・対話的で深い学び等に関する質問に対する回答と平均正答率の関係(数字は割合)

ア 質問「小学校5年生、または中学校2年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか。」

【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

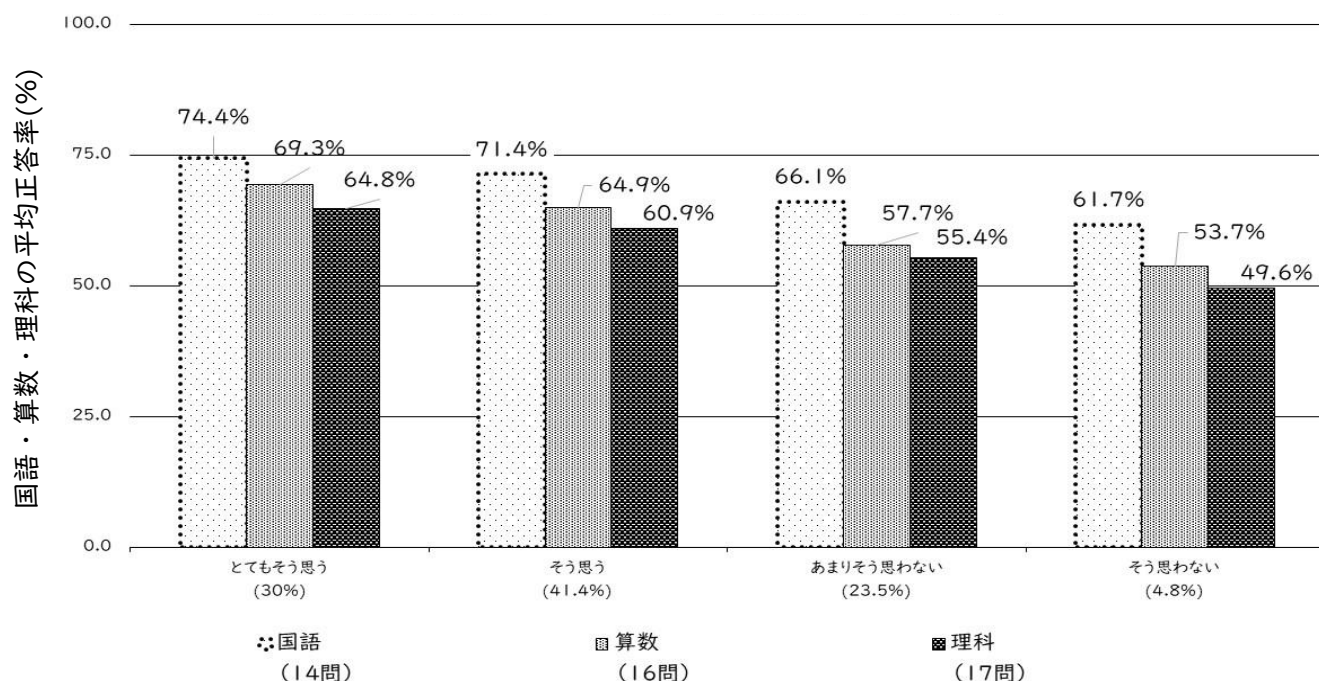


本質問に対する「ほぼ毎日」の回答率は、小学校39.2%、中学校31.5%でした。一人一台端末が導入されて7年めを迎え、学習に毎日有効に使うことができている児童・生徒が一定数いることが分かります。中学校においては「月1回未満」と回答した生徒の平均正答率と「ほぼ毎日」と回答した生徒の平均正答率を比べると、約15ポイントの差が見られます。引き続き、小中学校において一人一台端末は、使うことを目的とするのではなく、より効果的な学習の手段として活用を促進するよう研究を重ねることが重要です。

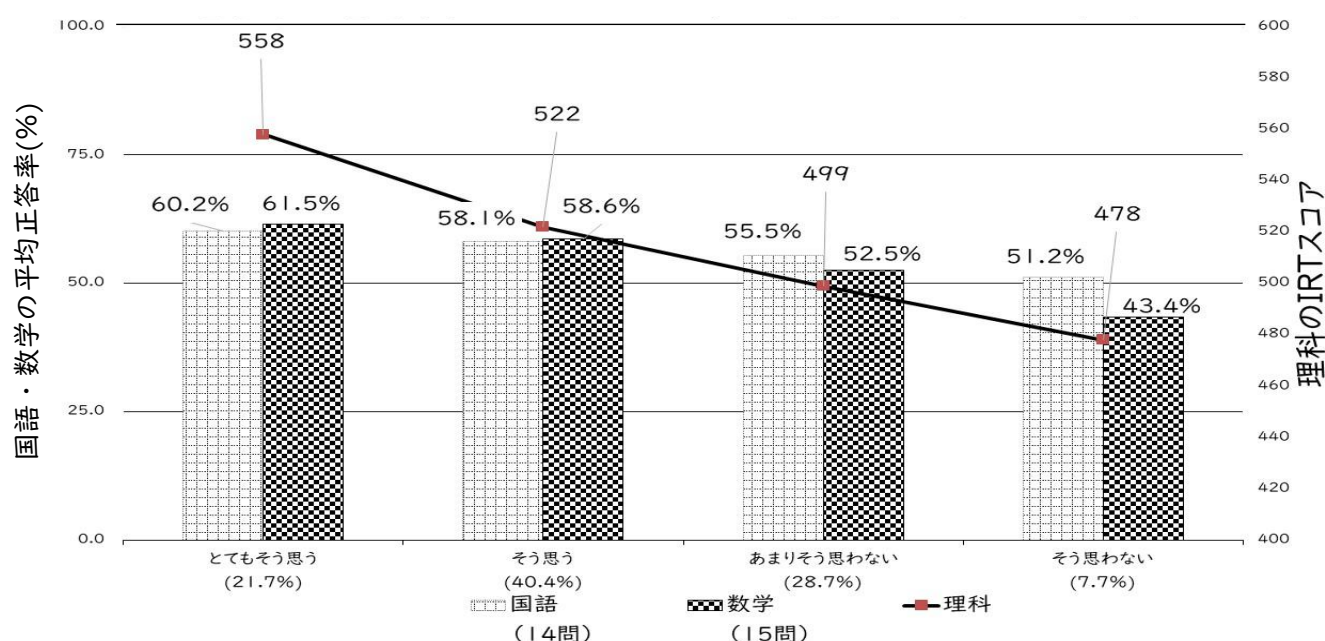


イ 質問「あなたは自分がPCやタブレットなどのICT機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができますか。」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



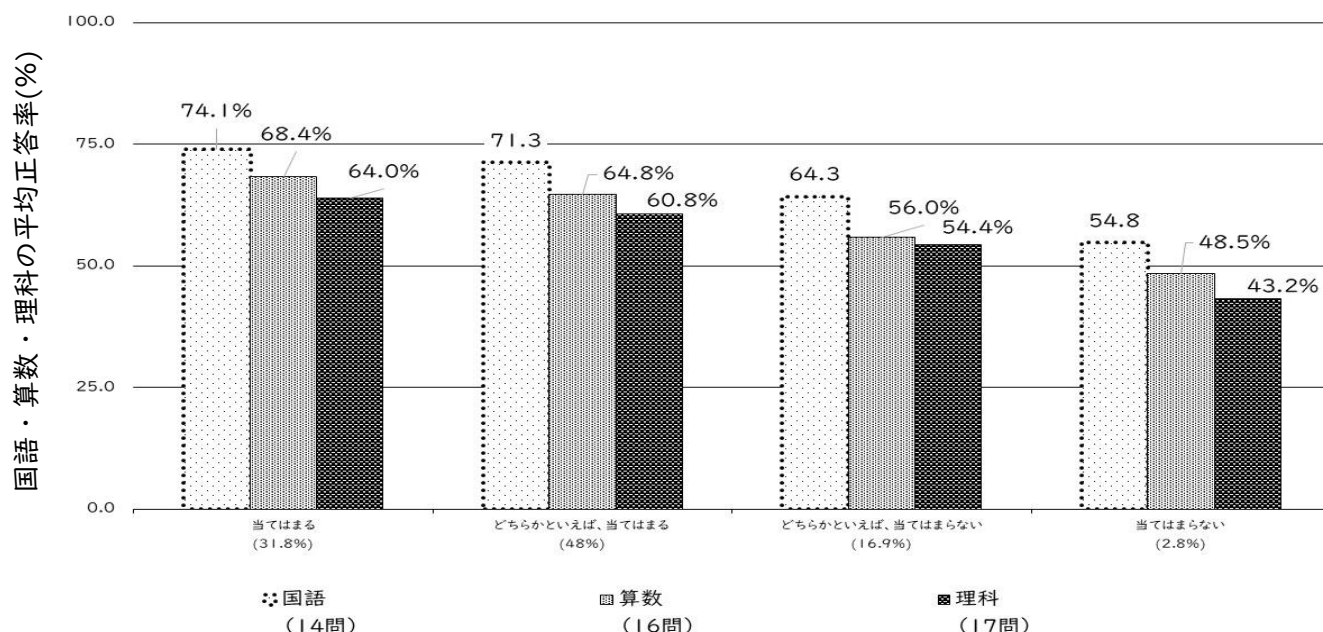
### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



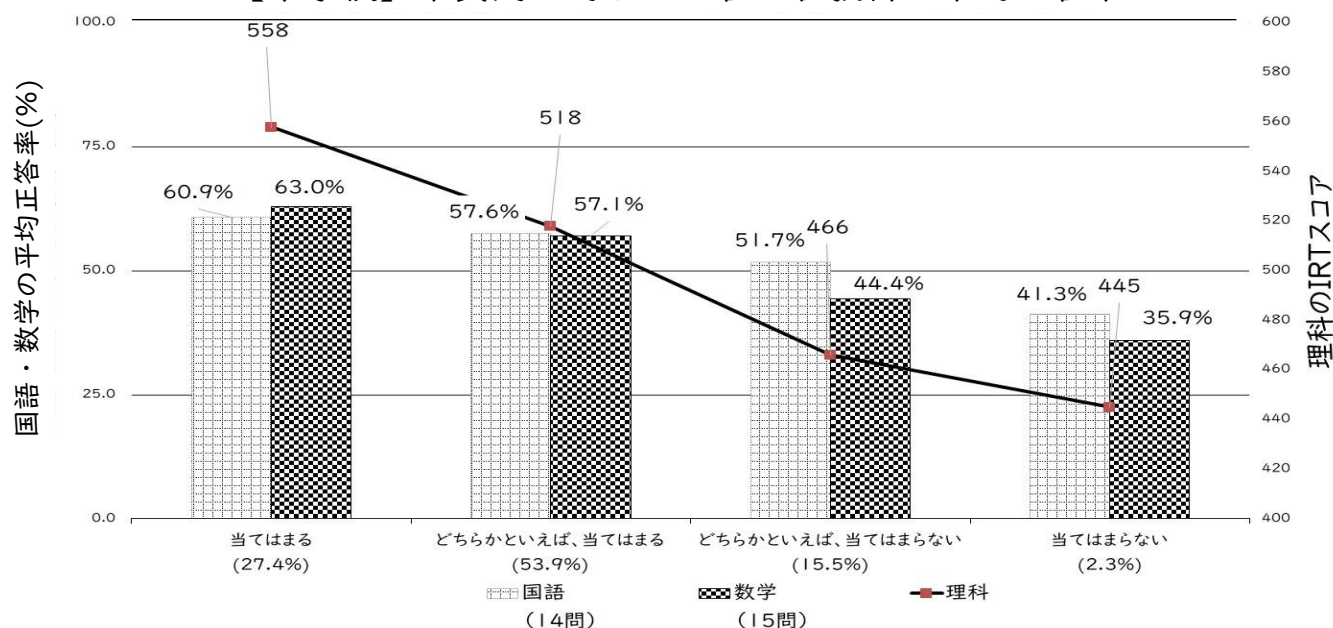
本質問は、本市の学力課題である「図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、それをもとに論理的に考えたり、自分の考えをまとめ、伝えたりすること」に深い関わりがあります。本質問に対して「とてもそう思う」「そう思う」という肯定的な回答率は、小学校71.4%、中学校62.1%であり、肯定的な回答をした児童・生徒の各教科の平均正答率は、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した児童・生徒の各教科の平均正答率より、小学校・中学校ともに約10ポイント以上高くなっています。このことから、本市の学力課題解決に向けて、ICT機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができるよう、授業でのより積極的な活用を続ける必要があると考えます。

ウ 質問「小学校5年生、または中学校2年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

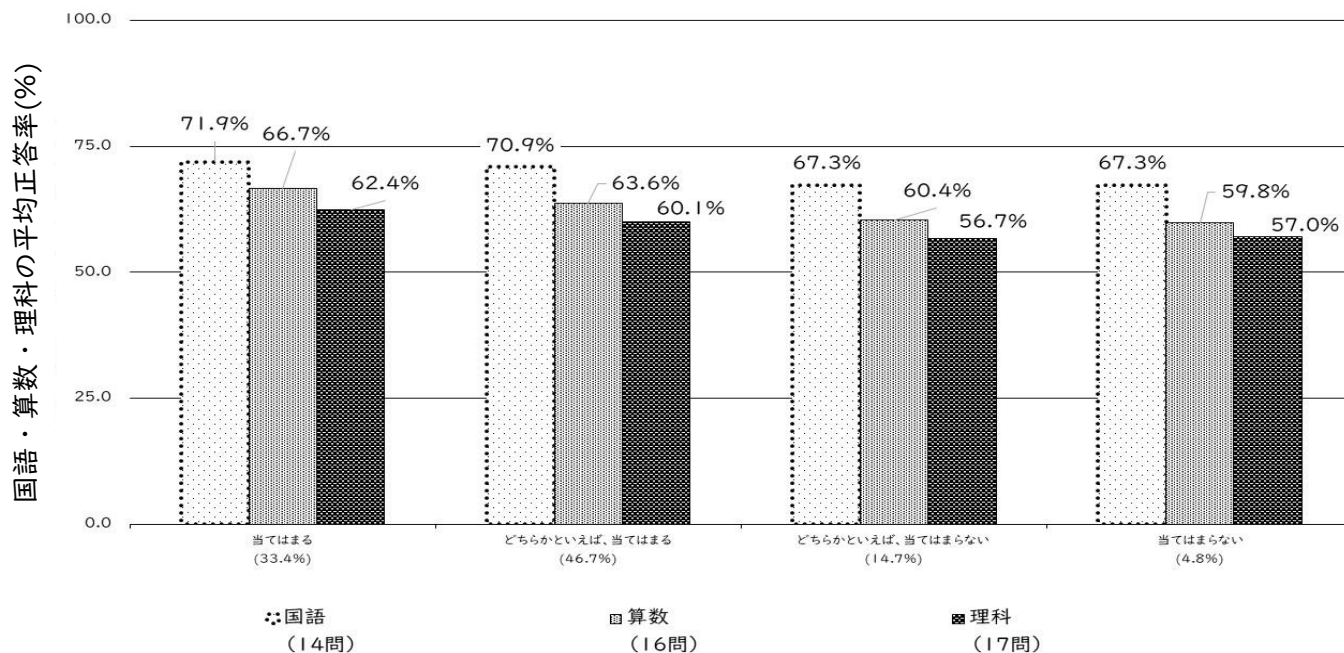


本質問は、学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現に深い関わりのある質問であるとともに、5ページ及び7ページで述べた各教科の学習の意欲にも大きく関わる質問であると考えられます。本質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答率は、小学校79.8%、中学校81.3%です。また、その平均正答率は、「どちらかといえば、当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童・生徒の平均正答率と比べ、小・中学校ともに約20ポイント高いことから、今後も授業において、課題の解決に向けて自分で考え、自ら取り組むことができるよう、「もっと考えたい」「やりたい」と思える学習課題や言語活動の設定を、今まで以上に工夫する必要があります。

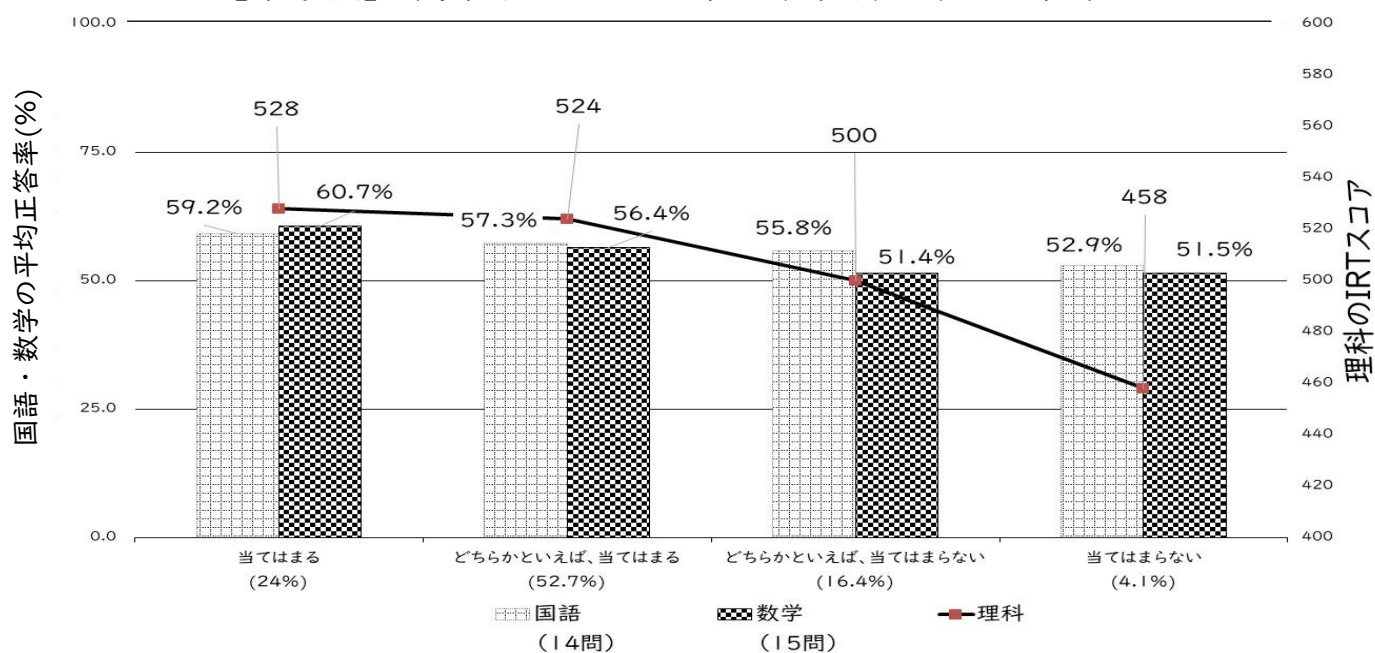


エ 質問「小学校5年生、または中学校2年生までに受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



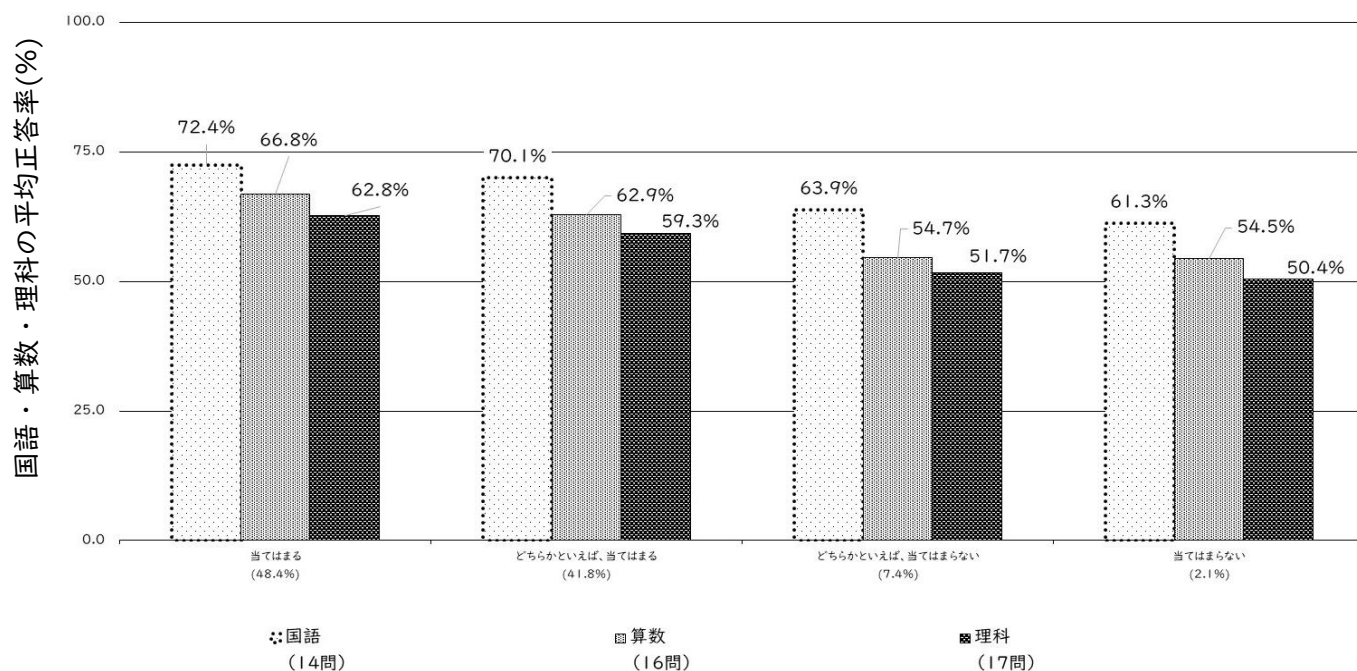
### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



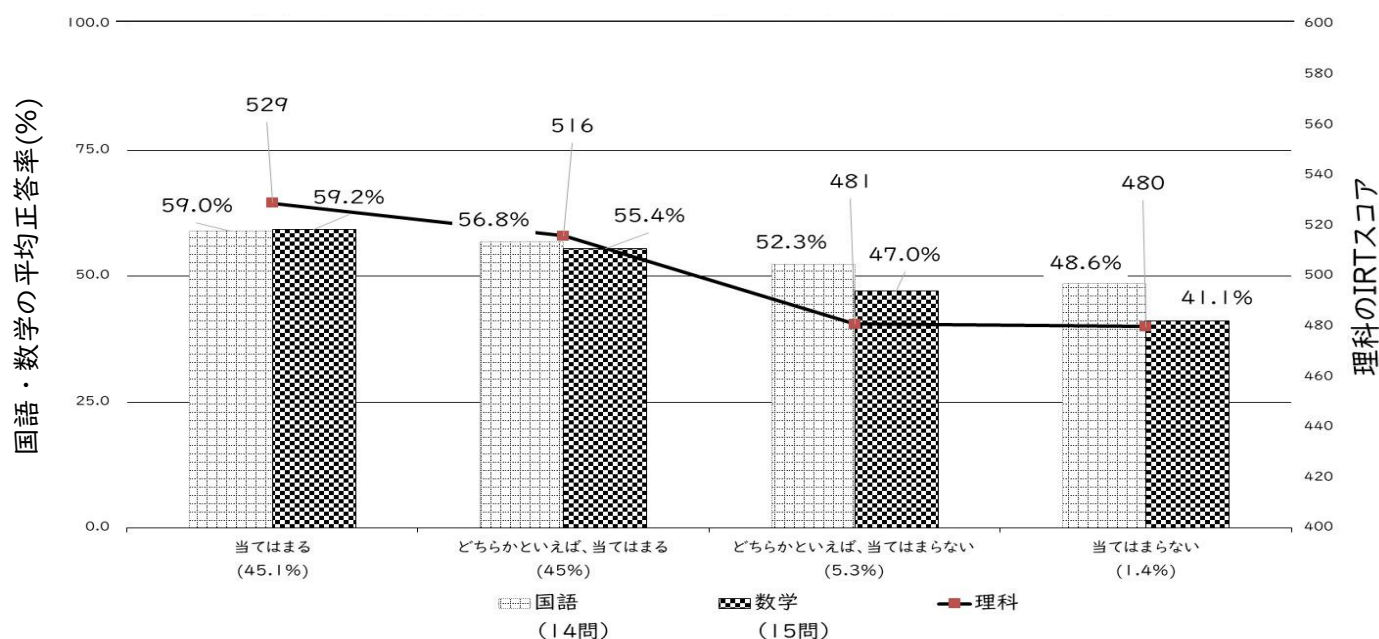
本質問は、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」と深い関わりがあります。また、不登校児童・生徒数の増加にも関わりのある質問と捉えています。全国同様、本市においても不登校児童・生徒数は増加傾向にあり、本質問に対する回答を注視する必要があります。約20%の児童・生徒が否定的な回答をしていることから、授業と生徒指導を切り話すことなく、一人ひとりを大切にしたい学びの時間とすることが大切です。肯定的な回答率が高いほど、各教科の平均正答率もわずかに高い傾向にあることから、引き続き個別最適な学びに向けた学習支援を進める必要があります。

オ 質問「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率

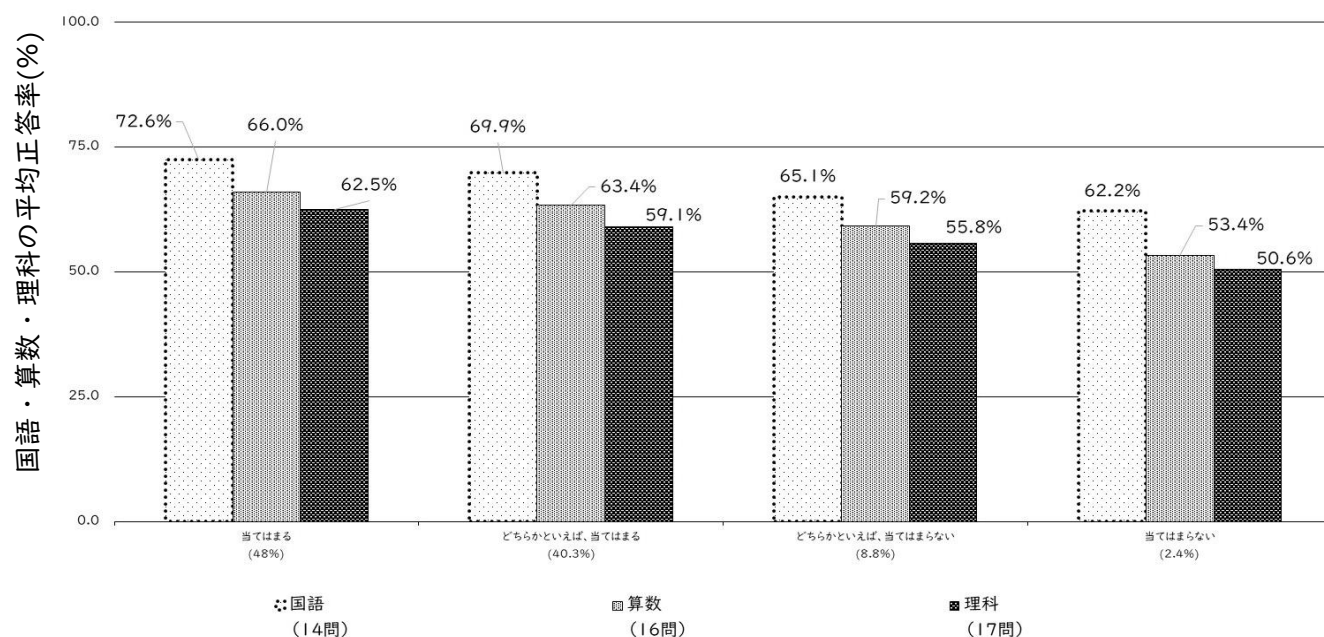


本質問は、特に、協働的な学びや対話的な学びと深い関わりがあります。各教科の平均正答率について、本質問に対する回答が肯定的になるほど高い傾向にあり、小学校・中学校ともに約10ポイント以上高くなっています。このことから、「友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題を解決」、つまり「協働的な学び」をすすめることで、児童・生徒がより学びを深められることが示されています。よって、児童・生徒同士の対話を大事にして、協働できる学習活動の工夫が必要です。

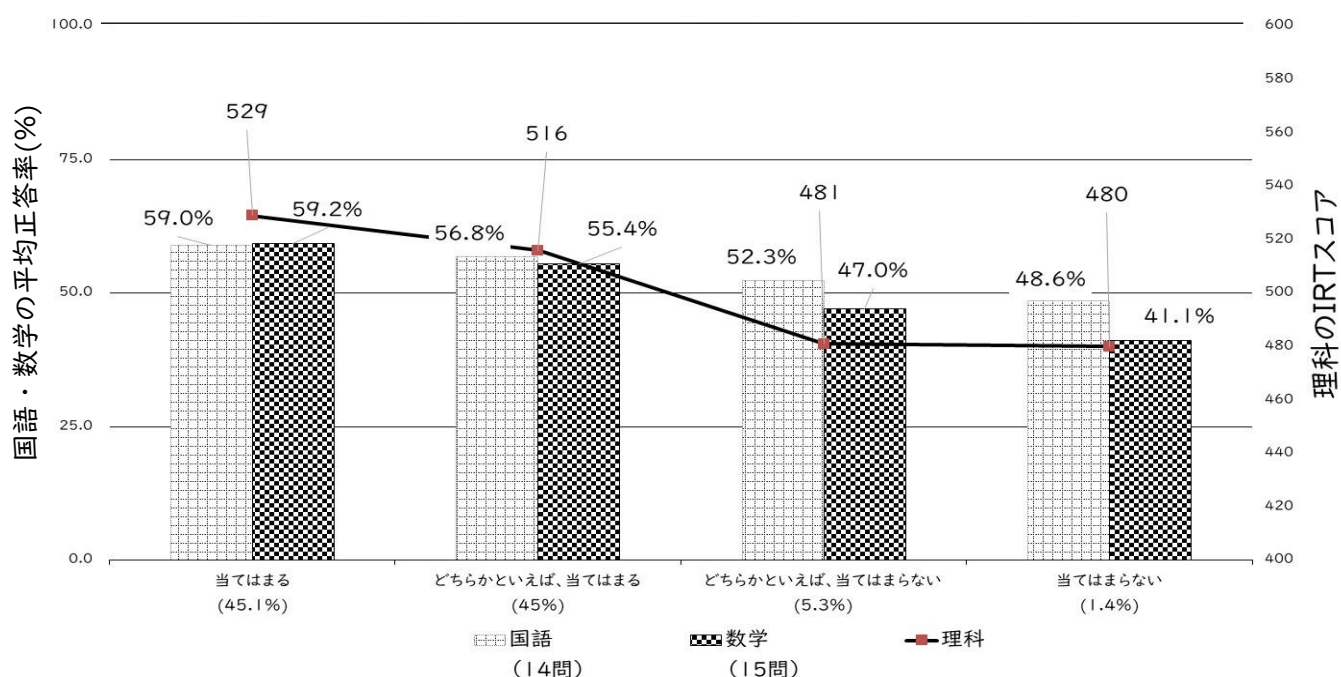


カ 質問「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」

### 【小学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



### 【中学校】本質問に対する回答と各教科の平均正答率



授業や学級活動等において、児童・生徒は他者と関わりながら様々な取組に励んでいますが、本質問は「特別の教科 道徳」に着目し、自身の考えの深まりにも着目した質問となっています。本質問に対する「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」という肯定的な回答率は、小学校88.3%、中学校90.1%でした。肯定的な回答をした児童・生徒の各教科の平均正答率は、そうでない児童・生徒の各教科の平均正答率と比べ、最大10ポイント近く高く、日頃からの他者との関わりが各教科の平均正答率に与える影響は十分にあると言えるため、普段の生活、コミュニケーションについても学校・家庭でともに見守る必要があります。

おわりに

## ～「総合的人間力の育成」を目指して～

学習指導要領では、(1)何を理解しているか、何ができるか(知識・技能)、(2)理解していること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)、(3)どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)の3つの資質・能力をバランスよく育むことを目指し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められています。

本市でも、学習指導要領に則り、各校において、児童・生徒が「見方・考え方」を働かせ、「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくり等の指導方法の工夫改善を図っています。

教育委員会としては、調査結果から見える各校の取組の成果や課題を真摯に受け止め、予測困難な社会を生き抜くための総合的人間力の育成に向けて、よりよい学びが実現されるよう支援してまいります。授業改善の方向性として、児童・生徒が自ら問いを持ち、課題を発見し、解決していく過程を経験する中で、一度立ち止まって批判的に考えたり、図やグラフ、写真、思考ツール等の様々な情報を関連付けたりしながら、自分の言葉で表現できるよう、教職員と児童・生徒の意識改革を推進します。そして、「好き」「楽しい」「おもしろい」といった探究につながる知的好奇心を大切にし、安心と安全のもと豊かな空間で学べるよう教育環境の整備を進めてまいります。また、「社会全体の教育力の向上」を目指して、調査結果の情報を学校・家庭で共有し、連携を進めてまいります。

令和7年(2025年)10月